

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

——敦煌の寓言詩に発して『今昔物語集』に及び、キルヒヤーの『シナ図説誌』に広がる——

湯谷 祐三

キーワード：敦煌・今昔物語集・キルヒヤー・シナ図説誌・亀飛行譚・パンチャタントラ・ジャータカ・米芾

一

京都大学文学部羽田記念館（内陸アジア研究施設 蔵の西域文献写真¹）のうち、「孝子伝」については、敦煌本「孝子伝」の新出資料として翻訳紹介し、その文学史的意味を考察すべく別稿を準備しているが、「孝子伝」の末尾に続けて書写されている奇妙な詩については考察を保留した。今回、この詩に関して、先行研究に導かれつつ関係する文献を確認してゆく過程で、その背景にある説話がインドから東南アジアにかけて広汎に分布しており、日本の古典文学にも影響を及ぼしていること、そして本邦に限っても、古くは南方熊楠から、近年は国文学的見地から増田良介・池上洵一、仏教文学の見地から松村恒・湯山明の各氏のごとく、また仏教美術の方面からもこの説話が注目され、優れた研究が輩出してい

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

ることを知った。本稿は中世説話文学研究の立場から、それら諸先学の驥尾に付して二三の資料を追加し、いささかの考察を試みるものである。問題の詩は、羽田記念館蔵西域文献写真²七五三・七五四に見え、舜の孝行説話の末尾の詩に続けて、改行せず、各句を区切らずに書写されているが、その筆跡は右の本文とは異なるものである。次にその本文を適宜改行して示す。なおこの本文は大変解読しづらいもので、断定するに不安を残す字がいくつかあることを申し添える（□は不読）。

詠神亀

海中有神亀 鳥擊共相隨 遊於世間故 首衆人不知
道鳥銜牛粉 口称我是亀 不能認口舌 被殺殘死屍

我薄時口當 此時習惡煩 名見苦舌口起 我人徒度世 猶如様殺神
海龜

敦煌の藏経洞から発見された膨大な典籍・文書群の内には、唐代を中心とする詩歌・詩集の完本や残巻が多量に含まれていて、これらには例えは白居易のように既に知られている作者の作品もあれば、敦煌本以外には他に全く見られない作品もある。また、伝残の状況もまちまちで、丁寧な字体で書写され良好に保存されているものから、經典の紙背に走り書きのように写された断片に至るまで様々な形態である。こうした敦煌出土の詩は、その残片にいたるまで、近年刊行された『敦煌詩集残巻輯考』に収録され、全容を伺うに便宜を得た。同書を検するに「詠神龜」詩はペリオ本P二一二九V（Vは紙背を表す）にのみ見られる。「老人相問嗟嘆詩」に続けて書写され、題名はないが詩の末尾に「敢上神龜一首」とあるにより「神龜一首」と名付けられている（図1）^②。

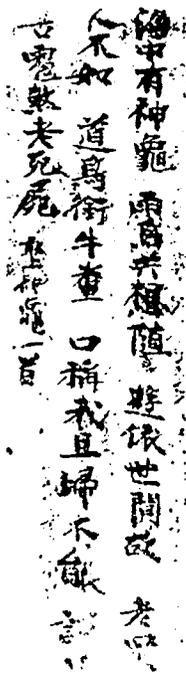


図1 ペリオP 2129 V『詠神龜』
（『法藏敦煌西域文獻』6の
210頁）

神龜一首
海中有神龜 兩鳥共相隨 遊於世間故 老衆人不知
道鳥銜牛糞 口稱我且歸 不能謹口舌 撲殺老死屍 敢上神龜一首

両者を比較するにいくつかの相違点が見られるが、「神龜」を題材にとった同一の作品とみられ、以後本稿では「詠神龜」と通称し、必要に応じて羽田本・ペリオ本と呼称して区別する。ところで、これだけでは一体何をいわんとするものか、すこぶる不明瞭であり、本文を校訂する前に、この詩の題材の正体が判明すれば、それに越したことはない。幸いにも『敦煌詩集残巻輯考』の注は、この「詠神龜」に関する周一良氏の先駆的研究の存在を示している^③。周氏によれば、この「詠神龜」の淵源は三国時代に翻訳された『旧雜譬喻経』卷下三十九話（大正蔵四卷）の説話にある。以下に示す本文は大正蔵のものであるが句点はそれに従っていない^④。

昔有鼈。遭遇枯旱湖沢乾竭。不能自致有食之地。時有大鵠集住其辺。鼈従求哀乞相濟度。鵠啄銜之飛過都邑上。鼈不默声問此何等。如是不止鵠便応之。応口開鼈乃墮地。人得屠裂食之。夫人愚頑無慮。不謹口舌其譬如是也。

即ち、湖水の枯渇により生息地を失った鼈（大亀）が大鵠に助けを求

め、大鶴は籠を直接口に銜えて空中を飛行し都市の上空に通過する。その時、亀が「これは何か」と問い続け、大鶴が思わずそれに応答しようと口を開いた瞬間、亀は地上に落下し、人に屠られ食べられたというものである。最後の文にも明らかのように、口を慎まないことを戒めるための譬諭説話として使用されたようであるが、いくら亀からの質問攻めにあつたとはいえ、落下の直接の原因は鳥の側にあることを注意したい。この説話は、唐代に編集された仏典の類書である『法苑珠林』巻第四十六、思慎篇、慎過部第五（大正蔵五十三卷）にも引用されている。

又、旧雜譬喻經云。昔有一籠。遭遇枯旱湖沢乾竭。不能自致有食之池。時有大鶴集住其辺。籠徒求哀乞相濟度。鶴啄銜之飛過都邑上。籠不默声問此何等。如是止鶴便忘之。口開籠墮人得屠食。夫人思頑不謹口舌。其譬如是。

見ての通り、『旧雜譬喻經』とほぼ同文であるが、注目すべきは「鶴」が「鶴」となっていることで、後で見る日本の『今昔物語集』でも「鶴」となっており、これと一致するのはこの『法苑珠林』所収話だけなのである（「鶴」と「鶴」の同義性については注（8）を参照）。

次に周氏は、劉宋時代に翻訳された『弥沙塞部和醯五分律』卷第二十五第五分初破僧法（大正蔵二十二卷）を挙げている（適宜私に改行して示す）。

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

目連復白仏言。奇哉世尊。調達罵云惡欲比丘。便以生身墮大地獄。仏言。不但今世昔亦曾以惡口生身受大苦。又問。其事云何。答言。過去世時。阿練若池水辺有二雁。与一亀共結親厚。後時池水涸竭。二雁作是議。今此池水涸竭。親厚必授大苦。議已語亀言。此池水涸竭。汝無濟理。可銜一木。我等各銜一頭。將汝著大水処。銜木之時。慎不可語。即便銜之。經過聚落。諸小兒見皆言。雁銜亀去。雁銜亀去。亀即瞋言。何預汝事。即便失木。墮地而死。爾時世尊因此説偈。夫士之生。斧在口中。所以斫身。由其惡言。心毀反眷。心眷反毀。自受其殃。終無復樂。若以財利諍。此惡未為大。惡心向仏者。斯乃為大惡。阿浮有百千。尼羅三十六。惡意無賢人。当墮此地獄。仏言。彼亀者調達是也。昔以瞋語致有死苦。今復瞋罵墮大地獄。

この説話になると、先ほどの『旧雜譬喻經』などよりも、話のディテールがより詳しくなっていることに気付く。即ち、亀を救出しようとしたのは「二雁」であり、その方法は『旧雜譬喻經』のように、直接亀を銜えるのではなく、「二雁」が一本の棒の両端を銜えて飛び、亀にその棒の中央部分を銜えさせて運搬するというものである。そして飛行の前に亀に対して会話を禁じている。また落下の原因は、『旧雜譬喻經』のように景色を不思議に思ったからではなく、地上の童子達が「雁が亀を銜えて

行くぞ」と誤解した（もしくは、はやしたてた）ことに亀が腹を立て、思わず「お前達の知ったことか」と悪口を吐いたことであり、すなわち発言者は亀のみとなり、亀の質問に鳥が口を開いたことにより亀が落下したという『旧雜譬喻經』では残っていた鳥の側の落ち度が全くなくなり、口を慎まない亀の過失がより一層浮彫になる効果をあげている。どうやら、亀の運搬方法と落下の原因に説話比較のポイントがあるようだ。なお、『五分律』のこの説話は、『法苑珠林』巻第八十二、六度篇、忍辱部第三、引証部第四（大正蔵五十三卷）にもほぼ同文で引用されているが、大きな違いはないのでここには引かない。

もう一つ、周氏が挙げている仏典は「根本説一切有部毘奈耶」巻第二十八違惱言教学処第十三（大正蔵二十三卷）である。

乃往過去。於一陂池有衆鵝群及以諸鼈。同共居止。中有一鼈。共彼二鵝而結親友甚相憐愛。後於異時遇天大旱陂水將竭。時彼二鵝俱至鼈所。報言知識告鵝曰。与汝久居情義相得。將遇厄難棄我他行。斯誠未可。鵝曰其欲如何。鼈曰汝等当可将我共去。鵝曰若為將去。鼈曰汝等共銜一杖。我咬中央共至清池。豈非善事。鵝曰我亦無辭。共相携帶。然汝立性好為言説不能護口。必当棄杖墜落空中。我等見斯更益憂苦。鼈曰我当護口銜杖不言。鵝曰斯為善計。即便覓杖各銜一頭。鼈咬中央騰空飛去。遂至一城市上而過。時彼諸人於虛空中見鵝持鼈。各生驚怪共相告曰。仁等親彼二鵝共偷一鼈。鼈聞此声默忍無

語。又到一城還從市過。時諸男女同前嗟歎。鼈便自念。我更幾時忍此辛苦。長懸頸項護口不言。即便報言。我自欲去。非是偷來。作是語時遂便失杖墮落于地。童子共打而致命終。二鵝見已情懷憂恨。飛空而去。于時空中有天。見此事已而説頌曰。善友利益言。若不能依用。墜落受辛苦。猶如放杖鼈。汝等苾芻勿生異念。昔時鼈者即闍陀是。昔時鵝者即難陀鵬波陀是。於往昔時間善友語。不肯依用遂致命。終乃至今時亦復如是。

まず、鳥の種類が「鵝」とあるが、これは「雁鴨科の大鳥で、がんの飼育変種」ということでよいとして、亀の運搬法は『五分律』と同様、二鵝が棒をくわえ亀がその中央をくわえるのであるが、ここでは亀のほうはその方法をとるよう進言し、鵝は亀のおしゃべり好きを懸念している。亀の落下の原因については、最初の都市の上空では「二鵝が亀を盗んでいくぞ」という地上の声にも口をこらえて我慢するが、次の都市ではこらえきれずに「おれは自分から飛んでいるのだ」と口を開いて墜落する。亀と鵝の対話が詳細になり、通過する都市の数も二つになるなど、『五分律』をさらに拡大したような形であり、亀の過失がより強調されている。

ここで漢訳經典の特徴をまとめてみると、大きく「旧雜譬喻經」のグループ（他に「法苑珠林」巻第四十六）と「五分律」のグループ（他に「根本説一切有部毘奈耶」巻第二十八）に大別され、前者は一羽の鳥が亀

を直接口にくわえて運搬し、地上からの声はなく、亀の質問に答えようと鳥が口を開いたことにより亀が落下するのに対し、後者は二羽の鳥が一本の棒の両端をくわえ、その中間を亀がくわえることにより亀を運搬し、亀は地上からの声に我慢ができず口を開いて落下するのである。

二

次に、先の「詠神亀」と漢訳經典との関係を検討すると、一句目「海中有神亀」は羽田本・ペリオ本共に同一であるが、亀の居る場所を海中とするのことや、亀も普通の亀ではなく「神亀」とすることなどは經典には見られない設定である。唐の歐陽詢撰『芸文類聚』卷九十六の亀の条文には、「大載礼記曰、甲之虫三百六十、而神亀為之長」「魏曹植神亀賦曰、亀号千歳、時有遺金龜者、数日而死、肌肉消尽、唯甲存焉」「説苑曰（中略）又亀千歳、能与人言」などあるから、「神亀」とは非常に長寿の亀で、人と会話もできる特別の亀であるらしい。また、「書経」「洪範」には「天与禹洛出書、神亀負文而出、列於背、有数至于九」とあり（大漢和辞典）、禹が洪水を治めた時、かの「河図洛書」の内の「洛書」を背に図して洛水から出たのが神亀であった。よって、中国文化史上、大変重要な意味をもつ動物が、「牛糞」呼ばわりされるのであるから、烈火のごとく怒り出すのも当然で、普通の亀でなく「神亀」を登場させた背景には、何か皮肉な意図も感じられる。

二句目は羽田本「鳥撃」よりもペリオ本「兩鳥」のほうが意味が通り

「亀が空を飛ばす話」の生成と展開

やすく、「兩鳥」とすれば、「詠神亀」は二羽の鳥により亀が運搬される【五分律】のグループに属する説話を題材をとることになる。三句目「遊於世間故」は兩者共通するが、亀移送の原因であり亀にとつて死活問題である池の枯渴を言わず、やらなくてもよい物見遊山であたら命を失ったという亀の死の無意味さが強調されているように思われる。四句目は最初の二字を羽田本「首衆」・ペリオ本「老衆」と相違する。どちらかと言えばペリオ本のほうが良いと思われるが、地上の見物人を老人に限定する必然性は全くなく不審。

五句目は地上の見物人が発する驚嘆の声の内容であるが、最後の字を羽田本「粉」・ペリオ本「糞」と相違する。ここは明らかに後者が良いだろう。「鳥が牛の糞をくわえて行くぞ」というとんでもない誤解に亀が立腹したとすれば、六句目は羽田本「我是亀」のほうがペリオ本「我且帰」よりもふさわしいであろう。ところでペリオ本の「且」字は写真で確認してもはつきりと「且」であるが、あるいはペリオ本の底本が「自」とするのを誤写しているとも考えられる。なぜなら、先にあげた「根本説一切有部毘奈耶」卷第二十八では「二鵝が亀を盗んでいくぞ」という地上の声に対し、亀は「我自欲去。非是偷来。」と答えており、これを受けてペリオ本の底本は「我自帰」となっていた可能性はある。ただし、これでは「鳥が牛の糞をくわえて行くぞ」という地上の声に対する返事としては不適當であろう。どうやら羽田本とペリオ本との関係は、同一あるいは同系統のものではなくそれぞれ少しく異なつた底本を書承している

ようであり、さすればこの「詠神亀」は細かい異本ができるほどに多数書写され流布していたとも考えられる。

七句目は羽田本「不能認」・ペリオ本「不能謹」であるが、これまでの検討によれば無論ペリオ本が適当であろう。八句目は羽田本「被殺残死屍」・ペリオ本「撲殺老死屍」と大きく相違しているが、ペリオ本の写真を見るに「撲」の解説には疑問を抱く。「老死屍」も意味不明で、説話の内容から見ても、羽田本の「殺されて死屍を残す」がしっくりとする。如上の考察の結果、「詠神亀」は鳥が二羽で亀を運搬しており、地上の声に亀が反応して落下していることから、「五分律」のグループに属する説話の系統であることが確認された。改めて「詠神亀」の暫定的な校訂本文を次に示す。

詠神亀

海中有神亀 両鳥共相隨 遊於世間故 老衆人不知
道鳥銜牛糞 口称我是亀 不能謹口舌 被殺殘死屍

三

周一良氏の指摘でさらに重要なのは、「友人張政烺先生」の教示によるとして、中国に伝わるこの説話の仏典以外の用例を紹介されたことである。まず周氏は栄成張氏所蔵の唐代の鏡に見られる圖像について次のように述べられる。

中央部分鼻以上両只鳥銜一棍子的兩端、一个鳥龜咬住棍子中間、儼然便是、「各銜一頭、鰲咬中央、騰空飛去」的樣子。鼻以下画二人騎馬在前、二人在後各舉一手追隨。

この記述によれば、問題の鏡の裏面の鼻の上部には、二羽の鳥が一本の棒の両端を銜え、棒の中間を亀が銜えている図が描かれ、鼻の下部には二人の騎馬人と二人の追隨者が描かれているようである。この場面に於いて周氏は「經過聚落諸小兒見」でなく、「遂至一城市上而過」でもなく、あるいは「共至清池」途中の景觀か、あるいは全く別の典故があるのかもしれないと、「根本説一切有部毘奈耶」の語句を引用して述べられる。

鼻の上部の図柄は明らかに「五分律」系のものであるが、問題は鼻の下部のそれで、描かれる騎馬二人と徒歩二人の位置関係や如何なる動作をしているのかも不明というしかない。今回その圖像を確認しようと種々の参考文献を検索したが、残念ながら該当するものを見いだし得なかつた。識者のご示教を仰ぎたい。

次に、宋代の米芾（一〇五一—一一〇七）は襄陽の人、特に翰墨に妙にして山水人物画にも一家を成したという。『宋史』巻四百四十四にその伝がある。米芾は「蜀素帖」なる作品を元祐三年（一一〇八）に揮毫して、その中に「擬古」と題する一連の詩がある（図2）。以下に本文

青松本無_レ筆安海保

歲寒

皇統拾遺
紙名出經

龜鶴年壽齊羽介所

記殊種_レ是靈物相得

忘形軀鶴有冲霄心龜

厭曳尾居以竹兩附口相

將上雲衢報汝慎勿語

一語墮泥塗

龜

を示し、私に訓読する(5)。

擬古

龜鶴年壽齊 羽介所託殊

種種是靈物 相得忘形軀

鶴有冲霄心 龜厭曳尾居

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

図2 米芾『蜀素帖』より「擬古詩」。「鶴亀一対志向型」である。(部分、『書道全集』15、昭和四一年平凡社)

以竹兩附口 相將上雲衢

報汝慎勿語 一語墮泥塗

亀と鶴は年壽齊しくして、羽と介(甲羅)と託する所殊なる。

種種是れ靈物にして、相得て形軀を忘る。

鶴に冲霄の心有りて、亀は曳尾の居を厭う。

竹を以て兩ながら口を附け、相將いて雲衢に上がる。

汝に報らす、慎みて語る勿れ。一語にして墮ち泥塗す。

題名「古に擬す」の「古」とは、例えば敦煌本「詠神亀」のごときも
のを指しているであろうか。まず目に付くのは鳥が鶴であるという点
である。前述のごとく、鳥を鶴とするのは「旧雜譬喻經」をもとにした
「法苑珠林」巻第四十六のみで、これが日本の「今昔物語集」と共通する
のに注目したが、ここにもう一つ類似する資料が出てきたのである。し
かも米芾の作品は「今昔物語集」の編纂時期(十二世紀前半頃)とも近
接する。さらに興味深いことに、米芾の詩では鳥は鶴一羽であるようで、
竹の棒の両端を鶴亀がそれぞれくわえて飛行するという漢訳經典には見
られない飛行法が示されている。また「慎みて語る勿れ」という注意は
既に「雲衢」に上がってからの発言のようだが、これでは発話者が鶴な
のか亀なのか特定できず(どちらが発話しても亀が落下するため)、責任
の所在があいまいである。以上、漢訳經典を始めとして中国の諸資料を

概観した。次に関係する日本の資料を検討したい。まず、『今昔物語集』を提示する(『新日本古典文学大系』所収本により、一部表記を改めた)。

『今昔物語集』巻第五の二十四話「亀、不信鶴教落地破甲語第二十四」
 今昔、天竺二世間早魃シテ天下ニ水絶テ、青キ草葉モ無キ時有り。
 其ノ時ニ一ノ池有り。其ノ池ニ一ノ亀住ム。池ノ水、旱失テ、其ノ
 亀死スベシ。

其ノ時ニ、一ノ鶴ノ、此ノ池ニ来テ喰。亀出来テ、鶴ニ値テ相語
 テ云ク、「汝ト我レト前世ノ契有テ鶴亀ト一雙ニ名ヲ得タリト、仏説
 給ヘリ。經教ニモ万ノ物ノ譬ニハ亀鶴ヲ以テ譬ヘタリ。而ルニ天下
 早魃シテ、此ノ池ノ水ヅ失セテ、我ガ命チ絶ユベシ。汝チ我ヲ助ケ
 ヲト。」

鶴、答テ云ク、「汝ガ云フ所ニツ無シ。我レ理ヲ存ゼリ。実ニ汝ガ
 命、明日ニ過グベカラズ、極テ哀レニ思フ。我レハ天下ヲ高クモ下
 クモ飛ビ翔ル事、心ニ任セタリ。春ハ天下ノ草木ノ花葉、色々ニシ
 テ目出タキヲ見ル。夏ハ農業ノ種種ニ生ヒ榮エテ様々ナルヲ見ル。
 秋ハ山々ノ荒野ノ紅葉ノ妙ナルヲ見ル。冬ハ霜雪ノ寒水、山川・江
 河ニ水凍テ鏡ノ如クナルヲ見ル。此ノ如ク四季ニ随テ何物カ妙ニ目
 出カラザル物ハ有ル。乃至極楽界ノ七宝ノ池ノ自然ノ莊嚴ヲモ我レ
 皆見ル。汝ハ只此ノ小池一ガ内ダニ難知シ。汝ヲ見ニ実ニ糸惜。然
 レバ汝ガ云ハザル前ニ水ノ辺ニ将行ムト思フ。但、我レ汝ヲ背ニ負

ニモ能ハズ、抱カムニモ力無シ、口ニ銜ヘムニモ便リ無シ。只為ベ
 キ様ハ一ノ木ヲ汝ニ銜ヘシメテ我等ニシテ木ノ本末ヲ銜ヘテ将行ム
 ト思フニ、汝ハ本ヨリ極テ物痛ク云フ物也。汝チ我ニ問フ事有り、
 亦、我レモ、誤テ云フ事有ラバ、互ニ口開キナバ、落テ汝ガ身命ハ
 損ナハレナム、何」ト云ヘバ、亀答テ云ク、「将行カムト宣ハ、我レ
 口ヲ縫テ更ニ云フ事有ラジ。世ニ有ル者ノ、身思ハズヤハ有ル」。鶴
 ノ、「付ヌル痾ハ失セヌ物也、汝チ猶信ゼジト。」亀ノ云ハク、「猶
 更ニ云ハジ。猶将行ケ」ト云ヘバ、鶴ニシテ亀ニ木ヲ銜ヘシメテ鶴
 ニシテ木ノ本末ヲ銜ヘテ高ク飛ビ行ク時ニ、亀、池ノ一ガ内ニ習テ、
 未ダ見モ習ハヌ所ノ山川・谿峯ノ色々ニ目出キヲ見テ、極テ感ニ堪
 ヘズシテ、「爰ハ何コソト」云フ。鶴モ亦、忘テ、「此ヤト」云フ程
 ニ、口開ニケレバ亀落テ身命ヲ失ヒテケリ。

此ニ依テ、物痛ク云ヒ習ヌル物ハ身命ヲモ顧ミザル也。仏ノ「守
 口摂意身莫犯」等ノ文ハ此レヲ説給ナルベシ。亦、世ノ人「不信ノ
 亀ハ甲破」ト云ハ、此ノ事ヲ云フソト語り伝ヘタルトヤ。

最初に注目されるのは「其ノ時ニ、一ノ鶴ノ、此ノ池ニ来テ喰。亀出
 来テ、鶴ニ値テ相語テ云ク、『汝ト我レト前世ノ契有テ鶴亀ト一雙ニ名ヲ
 得タリト、仏説給ヘリ。經教ニモ万ノ物ノ譬ニハ亀鶴ヲ以テ譬ヘタリ。
 而ルニ天下早魃シテ、此ノ池ノ水ヅ失セテ、我ガ命チ可絶シ。汝チ我ヲ
 助ケヨト。』とあることで、「仏説」の有無は不詳であるが、鶴と亀を一

対とする思想は、先にあげた米芾の詩と共通している。さらに「一ノ鶴ノ」と鳥の数を一羽と明記するのも重要で、空中からの四季の景観の美しさを述べる鶴の言葉をはさんで、「只為スベキ様ハ一ノ木ヲ汝ニ銜ヘシメテ我等ニシテ木ノ本末ヲ銜ヘテ将行ムト思フニ」と鶴が提案する運搬法は、このまま素直に理解すれば、まさに米芾の詩にいう「以竹兩附口」と同様、一本の木の両端を鶴亀がそれぞれくわえて飛行することである。亀の「極テ物痛ク云フ」性格を懸念する鶴は、自分の過失をも想定し「亦、我レモ、誤テ云フ事有ラバ、互ニ口開キナバ、落テ汝ガ身命ハ損ナハレナム」というが、もし二羽の鳥で運ぶなら、たとえ一羽が口を開いたとしても、もう一羽がくわえていられるわけで、これも鶴亀一対の状況をふまえた上での発言とされる。よってここまでの『今昔物語集』

の表現は、鶴が亀の性格を極度に心配するところなど『根本説一切有部毘奈耶』卷第二十八に一脈通じるものがあるにせよ、運搬方法に着目すれば、仏典にはその類例を見ず、かえって宋代の米芾の詩と共通する要素をもつのである。であるから、鶴がくどいほど亀に念を押して、いよいよ飛びたんとするところで、「鶴ニシテ亀ニ木ヲ銜ヘシメテ鶴ニシテ木ノ本末ヲ銜ヘテ高ク飛び行ク時ニ」と記述するのは、一つには鶴一羽と想っていたのが突然鶴二羽となり運搬法が『五分律』以来のものに変更された点、今一つは「鶴ニシテ」という言葉を短い文章の中であえて二回も繰り返すという点で、誠に不自然な印象を読者に与えるのである。逆に、これを不自然と思わない読者は、実は既に『五分律』系統の説話

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

や伝承を知っており、この説話は二羽の鳥が棒の両端をくわえ、中央をくわえた亀を運搬するものという観念が心理の奥底ができていて、だから鶴の最初の提案の言葉「只為ベキ様ハ一ノ木ヲ汝ニ銜ヘシメテ我等ニシテ木ノ本末ヲ銜ヘテ将行ムト思フニ」の「我等ニシテ」を、物語の冒頭で「一ノ亀」「二ノ鶴」と明記してあるにもかかわらず、鶴二羽と無意識に解釈してしまいうから、運搬法に変更があったとも思わないし、「鶴ニシテ」の繰り返しもこだわらないのかもしれない。

急に『五分律』系統の話形に変化した『今昔物語集』が、しかし、亀の落下の原因については、『五分律』系に共通して見られる地上からの声に亀が反応したという状況を採用せず、見慣れぬ景観に感動した亀が思わず「爰ハ何コソト」と鶴に問いかけ、鶴も自らの危惧を忘れて「此ヤト」と答えたことによるとするのは、かえって『旧雜譬喻經』の「鼈不黙声問此何等。如是止鵝便応之。」と類似した表現をとり、すなわち『五分律』系の運搬法では亀の落下に鶴の発言は必要でなく、鶴の責任は問われないはずであるのに、『五分律』系の話形に急変したかに見えた『今昔物語集』が、さらに一転、鶴も同時に口を開いたことにして、亀落下の責任の一端を担わせている。あきらかにここには話型の混淆が認められるわけである。

四

こうした『今昔物語集』の特異性の由来を考察する前に、日本におけ

るこの説話の他の用例を確認しておく。まずは『注好選』を掲げる（新日本古典文学大系本の読み下し文による）。

【注好選】下「双雁は渴せる亀を將て去る第十」

昔、二つの雁有り。旧き池の辺に芹の根を喰ふ。時に池の中より一つの亀出て来りて、雁に語りて云はく、「吾年来此の池の主として居住する間、縁尽き処淡でて、漸く帰する所無し。卿等若し恩有らば、吾を水香ばしく深く、食に飽くべき処に將て行け。其の由は、吾輒く行くに能はず。卿達は世界を広く見るが故なり」と。時に雁答へて云はく、「汝が言ふ所、尤も然なり。吾が往還の道に最も吉祥の処有り。所以は、北は峨々たる滄海遠からず、西は眇々たる長き尾聳き連れり。其の北の山の峽より三里許南に、方一町の池有り。山の水は北より恒に加はり、海沢は東より潜り融れり。池の近き辺は、四季に林ありて、花を開きて菓を結ぶ。都て極めたる嘯き物の住む処なり、色好みの遊び地なり。亦、敵の恐れ無くして、永く飢渴の愁へを離れたり。吾が大祖父往還の次に此の処を見て、讚めて云はく、「左青竜、右白虎、後玄武、前朱雀、相称へる勝地なり」者。汝実ならば將て行かむ。而も彼の池に主無し」と。

時に亀手を摺り、膝を屈めて云はく、「吾を君達早く將て行け」と。即ち雁、亀に語りて云はく、「吾は飛びて道を行く。汝は昆ふて道を行く。進退事毎に然り。能く吾等が言に随はむや」と。亀云はく、

「吾が身を思はぬ人や有る。只卿等が言に相違せじ」と。即ち雁云はく、「汝一つの木に咋ひ着きて、彼の池に至るまで口を開かざれ。設ひ途中に人有りて打ち罵ると雖も、汝努力口を開きて答へざれ。吾等木の左右の端を咋へて、急ちに速かに將て去らむ」と。

時に、約りて將て行く。即ち一つの市を過ぐる間、数十人の童子有り。亀を見て咲ひ罵る。其の声甚だ喧し。時に亀、忍びずして罵り返す。仍りて木を離れて、童子の中に落ちて打ち殺されぬ。

即ち此の譬へを以て衆生を誡む。亀とは衆生なり。木とは教法なり。二つの雁とは仏と菩薩となり。彼の池とは万徳円満の浄土なり。此の池とは娑婆なり。市とは天界なり。童子とは天子・外道なり。口を開くとは、聴聞の庭に善根を語りし砌に、雑言を作すなり。死とは永く悪道に墮つるなり。努力之を信ぜよ。

題名に「双雁」、冒頭にも「二つの雁」と鳥の数を明記し、亀が言葉の端々で「卿等」「君達」と呼びかけ、雁は自らを何度も「吾等」と称していること、亀が地上の笑い声に反応して墜落していること、そして何よりも、「汝一つの木に咋ひ着きて」「吾等木の左右の端を咋へて」とあることにより、「今昔」とは反対にむしろくどいほど『五分律』系の説話であることを強調してまぎれるところがない。ところで、『今昔物語集』と『注好選』との密接な関係を指摘された先駆的研究者である今野達氏は「現段階では、注好選を今昔の直接の取材源、つまり出典と推断しておく

たい」とする一方、「注好選的テキスト」「注好選の本文」「注好選のごとき簡便なテキスト」等の微妙な表現も使われると共に、「十二話以外の同文的同話の中に、同文度においてなお一考すべき若干の問題は残されている。しかしそれは、注好選が今昔の出典たることを疑わせるものではなく、むしろ今昔が注好選以外の資料を参酌したと見る方向で解決できる性格のものである」とされる⁶⁾。ここで素朴な疑問として、「今昔」は他の説話では「注好選」をほとんど転載する形で利用しているのに、何故、折角「注好選」下巻にある「双雁と亀」の説話はそのまま利用しないのかと不思議に思われるのである。特に、「今昔」当該話の前後の説話は「注好選」とほぼ同文でとりわけ一致度が高く、何故当該話だけが「注好選」と大きく相違するのか理由がわからない。「注好選」を見ていながら、あえて「注好選以外の資料を参酌」して説話を改変したとすれば、そこに「今昔」編者の意図が反映していると仮定して、あれこれと「編者の意図」を付度することになるのだが、これまで明らかになつていない。「今昔」編者像からすると、彼は依拠資料に対してそれほど大きな改変を施す傾向にはなく、やはり「今昔」は現存「注好選」を直接参照したのではなく、「注好選」と類似する説話を含んだ同様の資料を見ているのではないか、そして当該話はそのから取材されたものではないかとも思われるのである。ただしそうした資料は今のところ報告されておらず、あくまでも想像の域を出ない。

次に文永・弘安頃の成立といわれる古辞書「塵袋」を示す（覆刻日本

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

古典全集」所収本の影印による。「塵添壘囊抄」巻第二は同文

一、信ナキ亀ハ甲ワルト云フ如何

過去世ニ釈迦如来ト提婆達多ト一所ニムマレアヒ給トキ、釈迦ハ雁ニムマレ給フ。達多ハ亀トナレリ。旧好年ヒサシカリキ。或ル時ヒテリシテ此ノカメノスム池ノ水ミナカハキツキヌ。亀是ヲクハヘテハツサスハ、ワレエタヲフクムテトヒテ水ノユタカナルトコロヘウツラン、アナカシコ、クチアクヘカラスト云フ。カメ悦テ承諾シテ雁ノヲシヘノマ、スルニ、トフ時キ、人是ヲ見テアヤシミワラフ事限リナシ。カメイカリテ是ヲノルニ、クハヘタル所ハナレテヲチヌレハ、甲ワレテ死ヌト云ヘハ、信ナキカメ甲ワル、コレヨリハシマル歟。一切有部根本毘奈耶ニ見エタリ。

まず題名からして「今昔物語集」のそれ（「亀不信鶴教落地破甲語」との類似が注意されるが、不思議なことに「今昔」は末尾に「世ノ人、不信ノ亀ハ甲破ト云ハ、此ノ事ヲ云フゾト語り伝ヘタルトヤ」とある以外に、本文中には「亀落テ身命ヲ失ヒテケリ」とあるだけで、甲羅については何も言及がない。「塵袋」を見るに「信ナキ亀ハ甲ワル」という言葉は当時一種のことわざとして流通していたごとくで、全国に流布する昔話「雁と亀」でも亀甲模様の由来譚をとるものが多いことから、「今昔物語集」の説話について、池上洵一氏は「その時点における伝承者（同

時に説話の筆録者)は、おそらく「珠林」巻四六に淵源する仏典説話を自己に親しい民間伝承の話型と融合させつつ受容したのである」と述べておられる⁷⁾。亀甲の由来譚にはなっていないが、敦煌本の「詠神亀」や米芾の「擬古」詩の存在を考慮すれば、既に中国においてこの説話は俚諺のような形で流布していたことは想像に難くなく、日本の「民間伝承」がそうしたものの影響を受けた可能性がある。

さらに興味深いのは「塵袋」の話型で、雁と亀をそれぞれ釈迦と提婆の前生に比定するのは「五分律」の設定だが、「塵袋」の末尾にいう「一切有部根本毘奈耶」(「根本説一切有部毘奈耶」のことであろう)では、それぞれ難陀と闍陀とする)、⁸⁾「五分律」や「注好選」のように「二雁」とはどこにも記されず、むしろ釈迦・提婆に対応することから、雁二羽・亀一匹と解釈せられ、また運搬法も「亀是ヲクハヘテハツサスハ、ワレエタヲクムテトヒテ」とあるから、これも予見なく読めば、一本の棒の両端を雁と亀がそれぞれくわえて飛行する図が想像でき、これはまさに「鶴二シテ」と唐突に記すまでの「今昔物語集」前半部や米芾の「擬古」詩と一致している。

それぞれ特色のある日本の三種の資料を概観して、改めて「今昔物語集」の複数の話型が混淆した表現の特異性を考える時、逸することができないのは、増田良介氏の論考であろう⁹⁾。こうした説話構成上のほころびに着目し、「今昔物語集」の説話生成の経緯を考察した同氏は、「今昔」の前の段階にあった「一羽の鶴と一匹の亀が棒の両端

をそれぞれくわえて空中旅行する」という説話の存在を想定され、「今昔」の直接の依拠資料にあったのは、二羽型ではなく一羽棒型の話だった可能性が強いということになる」とされた。次に、「今昔」は唐突に「鶴二シテ」と「五分律」系の話型に転換させてたにもかかわらず、落下の原因は地上の声に亀のみが応じて口を開いたためとする「五分律」型をとらず、鶴亀双方の間答によるという「旧雜譬喻經」系の型式に戻るところに、増田氏は「鶴と亀を対等な一對として扱おうという姿勢」(氏のいわゆる「鶴亀一対志向」)の存在を指摘している。その他、自然景観の描写における「今昔」と「注好選」との関係についての考察も重要だが、ここではふれない。

筆者の見解を述べると、増田氏が予見した「一羽棒型」説話が、それが氏のいうように「法苑珠林」の二つの話の接合によって「できあがったものであるかどうかはさておき、まさしく存在したものであることが、本稿で指摘した宋代中国書家米芾の「擬古」詩により保証されたと考える。ただし、同氏は「一羽棒型」説話の形成者として、「法苑珠林」などからいくつかの話を選んで和訳し、「注好選」のような説話集を編纂しようとしている人物」と、本邦の人間を想定しておられるようであるが、これも米芾の詩により、既に中国において「鶴亀一対志向」をもった「一羽棒型」説話が展開していたであろうことはほぼ間違いない。それが何らかの形で我が国に舶載され、直接、あるいは何度かの書承を経た後、「今昔物語集」編者の目にふれたのではなからうかと考えるのである。

五

つとに南方熊楠は日本各地に残る「亀の甲の由来」と総称される昔話の典拠に関する考察を発表して、『旧雜譬喻経』や『五分律』以下、漢訳經典の指摘に及んでいる。⁹⁾さらに南方はこの話の淵源が古代インドの寓話集パンチャタントラ (Panchanttra) やジャータカ (Jataka) にあることを指摘している。同様の指摘は周一良氏も行っているが、それらの源流は、ベンフアイ (Theodor Benfey, 1809-1881) の研究にあるようだ¹⁰⁾。パンチャタントラは紀元二世紀頃から四世紀初めにかけてその原型が成立し、本文の成長と変化を伴いつつ六世紀以後に現在の姿となり、漸次アジアの各地に広く流伝して多種の伝本を残している。八世紀にはアラビア語に翻訳され、十一世紀にはこのアラビア語からギリシャ語に訳され、十三世紀にはヘブライ語・スペイン語訳も作られた。ヘブライ語訳を基にしたラテン語訳(一二七〇年頃)は、そのドイツ語訳(一四八三年)によって広くヨーロッパに普及したという。ワグナー (Wagner) の楽劇で名高いハンス・ザックス (Hans Sachs) やラ・フォンテーヌ (Jean de La Fontaine) の『寓話』 (Fables) も、そこから多くの材料を得ている¹¹⁾。また、パンチャタントラと他の文献(例えばジャータカやイソップ物語)とが如何なる文献学的交渉を経過しているかは興味深く重要な問題である。

近年、「亀の飛行譚」に関して、この説話を掲載する諸文献を博搜した

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

松村恒氏の浩瀚な書誌研究が示され、基本となる文献は出そろった感がある¹²⁾。パンチャタントラの諸本を収集し、ジャータカや漢訳・梵文・西藏語訳の仏教經典等と細かく比較検討すれば、この説話の展開がうかがえると共に、各種文献間の関連の度合いを明らかにする端緒にもなりうると思われるが、如何せんパンチャタントラに限っても、その諸本関係は複雑で到底梵文を解さぬ筆者がうかつに手出しする領域ではない。とはいえ、パンチャタントラの本文を提示せねば以下の論述が一步も進まぬため、以下にパンチャタントラの四つの主な系統を示し、手元に入手できた邦訳・英訳・中国語訳などを利用して本文を提示する¹³⁾。あくまでも便宜上の措置である。

I タントラーキヤイカ系 (Tantakhyika)

パンチャタントラの原本に最も近いとされる伝本(筆者には六世紀以前としかいえない。注(11)参照)。テキストは後で詳しくふれるクロツケ氏 (Marjke J. Kokke) の論文に掲載された英訳を転記させていただく(a)¹⁴⁾。また、この系統にはジャイナ教徒によるとされる二種の伝本(九〇〇から一〇〇〇年頃とされる小本と一九九九年の広本)があるが、小本 (textus simplicior) のテキストは注(11)の田中於菟弥・上村勝彦両氏訳『パンチャタントラ』により(b)、広本 (textus ornator) のテキストはリーダー (A. W. Ryder) の英訳本により、季羨林氏訳『五卷書』¹⁵⁾を参照した(c)。

II プリハットカター系 (Bṛhakkathā)

散逸したグナーディの大説話集「プリハットカター」の要約本二種の内、十一世紀のソーマデーヴァによる「カターサリットサーガラ」(Kāṭhāsarasīgāra) の英訳本¹⁵⁾を用いる。

III 南インド系 (Southern Pancalantra)

「ヒトローパディーシャ」(Hitopadesa) をもつてこの系統の代表とするには問題があるが、これ自体重要な伝本であり、他の伝本に適当な訳本がないのでまずはこれを提出する。田中於菟弥・上村勝彦両氏訳「パンチャタントラ」の解説によれば「ネパール本とその原形の系統に属し、他の資料をも含めて、全く趣を異にするベンガル地方に流布した伝本である。作者ナーラーヤナ(九〇〇—九五〇頃)は、「パンチャタントラ」の五巻を四巻に改編して面目を一新し、新たに一七篇の挿話を加えている。」とされる¹⁶⁾。

IV パーラヴィー訳本系 (Kaliya wa Dimna)

田中於菟弥・上村勝彦両氏訳「パンチャタントラ」の解説によれば、「西北インドに伝わった「パンチャタントラ」の一伝本を基にして、イラン王アヌシルバン(六世紀ササン朝の名君ホスロー一世(在位五三—五七八)のこと—引用者注)は、宮廷医ブルゾエ(Burzoe)(アラビア語読みでバルサワイヒー—引用者注)に命じて、五五〇年頃これを中期ペルシア語のパーラヴィー語に翻訳させた」とある。このパーラヴィー語訳本は散逸したが、その古代シリア語訳(五七〇年頃)とアラビア語訳

(七五〇年頃)が現存し、このアラビア語訳本の題名を「カリラとディムナ」と言う。これは十一世紀のギリシア語訳や十三世紀のヘブライ語訳・スペイン語訳のそれぞれの底本となり、ヘブライ語訳を基にしたラテン語訳(一二七〇年頃)、さらにそのドイツ語訳(一四八三年)により広くヨーロッパに普及したという。要するに、ヨーロッパに流布したパンチャタントラのおおもとに位置するのが「カリラとディムナ」である¹⁵⁾。

次に、以上のパンチャタントラの代表的な四つの系統の本文の関係を検討するが、その前に、このパンチャタントラと密接な関係にある釈迦の本生譚ジャータカを紹介しておく。両者の先後関係については、それぞれに複雑な成立事情が介在しているが、ここではともかくも、ジャータカが先行してパンチャタントラに利用されたと考えられているようだとのみ述べておき¹⁶⁾ Jataka No215 Kacchapa-Jataka の翻訳を引用する¹⁷⁾。

以上、四種のパンチャタントラとジャータカの引用に当たっては、煩を恐れ、古態本とされるタントラーキヤイカ(Tantakhyayika) I a のみをここに提示し、他の諸本の本文は本稿末尾に付し随時参照することとする。

I a タントラーキヤイカ系 (Tantakhyayika)

A tortoise named Kambugriva lived in a certain lake. He had two friends, two geese named Vikata and Sankata. Then, at an unfavourable turn of

time a twelve year long rainless period set in. Thereupon both of them thought : "The water of this lake has diminished. Let us go to another lake. But let us say farewell to our dear friend Kambugriya who has dwelt (with us) for a long time". And when it had thus happened the tortoise addressed them : "Why do you say goodbye to me? Pray, if you love me, please save me also from these jaws of death because for you it means only insufficiency of food in this lake which contains very little water, but for me it means death. You should consider this. Which of the two is worse : being without food or being without friends?" The two of them said : "You have spoken properly, you are right. But do you know the right time? By all means let us take you away. However, you should not out of forgetfulness say anything. Set your teeth in the middle of this stick. After we have thus raised you with its help as it were, we will carry you all the 60 yojanas to a large lake. There we will live happily". When this was done and the people saw him being carried over a city near that lake, they all approached talking in confusion. "What is this that has the size of a wheel of a carriage and is being carried through the air?" And after he had heard that, the tortoise whose end had approached let go of the stick and said : "I am a tortoise ; out of thoughtlessness the people here talk rubbish". At the same time, while he was saying these words, he dropped off the thing that held him and fell on the ground, and

as soon as he had landed, the people who were longing for meat divided him into pieces with sharp knives. Therefore I say : of friends who wish for the good etc. (end of the translation).

総じて説話の語型としては、I・II・III・IV・Jataka 共に二羽の雁と一匹の亀が登場し、鳥が棒の両端を、亀が棒の中央をくわえる、まぎれもなくおなじみの二羽棒型であることは共通する。どつやら、これが書承された「亀飛行譚」の基本型式であるらしい。すると、例えば漢訳経典の【旧雜譬喻経】(三世紀初頃の成立か)などは記述量が少なく一見ブリシティブな形をしているが、鳥が直接亀を銜えたり、鳥と亀の間答により亀が落下するなどという設定は、決して一般的なものではなく、むしろ特殊な例外であることがわかる。反対に【五分律】は、亀を調達の前生に比定したり、末尾の「悪言」を戒める偈文を除けば、語型はほぼ Tantrokyayika に一致する点、パンチャタントラの古態をある程度忠実に継承していると考えられる。

冒頭部分で、I a I b I c II は、共通して亀と二羽の雁にそれぞれにカンブグリーヴァ、ヴィカタ・サンカタと名前が付けられている (I c の英訳本は意識)。しかし、降雨がない期間を十二年と明記するのは I a I c のみで、こちらに、二羽の鳥が親友の亀に別れを述べる場面で、亀が鳥たちに「あつして別れを告げるのか。私のことが好きならどうか助けてくれ云々」と懇願する台詞も I a I c のみに共通し、若干 I c のほ

うが長くなっている。Iの系統の成立の順はI a I b I cであるというから、ここまではひとまず次のように考えてみる。I cの広本 (textus ornator) とはI aに対して「広」という意味であり、I bの小本 (textus simplicior) を増補したものではない。逆にI bの小本はI cの広本を略したものではなく、I aを略したもののごとくである。つまりI b I cそれぞれが独自にI aに加工して成立したかに見える。しかし、読み進むことはそう単純でない。I aでは、亀の懸望を否み難く、鳥のほうから亀の運搬法を提案し、飛行中の注意事項を示している。ところがI b I cは共に亀のほうから自らの運搬法を提示し、口を喋むと約束している。この点に注意して諸資料を分類すると、鳥から提案するのはI a II IVとJatak, 亀から提案するのはI b I c IIIである。運搬法の提案をどちらからするかは、説話の構造に関わる問題であるから、先の考察ではI aとI b I cの間には何らかの直接的な関係も予想されたが、このような無視できない相違点も存在するのであり、I aを省略、増補してI b I cが成立するというような直線的な関係ではなさそうである。かえって、I aとIIを比べると、両者は説話の基本構造を同じくし、IIにはI aに還元できない情報は何もないことから、I aを抄出するとIIのような形になるということはいえる。また、I aとJatakは共に鳥から提案しているから、両者の古態性を鑑みて、鳥からの提案がこの説話の最初の設定であつたらうとも推定される。ここで再び漢訳経典を想起すると、『旧雜譬喻經』は「鼈從求哀乞相濟度。鶴啄銜之飛過郡邑上」とあり、亀

が救助を求めたのは確かだが、具体的にその方法を提示したのがどちらかについては定かでない。『五分律』では「二雁作是議。(中略) 議已語龜言」とあるから、鳥から提案したのは間違いない。それに反して『根本説一切有部毘奈耶』では「鼈曰汝等當可將我共去。鵝曰若為將去。鼈曰汝等共銜一杖。我咬中央共至清池。」と、亀のほうから運搬の依頼と方法の提示を行っている。『五分律』は現存する律の中では最も古いとされ、その成立年代は「阿育王以後、紀元迄の間である」とされている²¹⁾。『根本説一切有部毘奈耶』については、「本律は十誦律を基本として増長したるものなることは内容比較上より拒み得ない」(仏書解説大辞典)とされているから、その成立年代は「十誦律」の成立年代とされる三世紀中頃²²⁾以降で、干潟龍祥氏はこれに収められた本生経類は「五分律」に遅れると考えられている²³⁾。このことは、鳥から提案する形がこの説話の最初の設定であつたらうとの、先のパンチャトラ諸本の比較で得られた推定とも合致して首肯できるし、逆に「鳥からの提案」から「亀からの提案」に変化した時期(これは従来はつきりしていないI b I cの成立年代の上限でもある)を「根本説一切有部毘奈耶」の成立以前に求めることができる。パンチャトラの説話の新古と、それに対応する漢訳経典(もちろんその底本となった梵本)の説話の新古とは連動しているようである。

次に落下の原因についても検討しておこう。I・II・III・IV・Jatak共に、亀は地上の声に応答して落下しており、鳥と亀の問答により亀が

落下し、地上の人間は登場しない『旧雜譬喻經』の特異性がまたしても浮かび上がる。地上の声の内容についで、I a 「size of a wheel of a carriage」I b 「車輪みたいなもの」I c 「cartlike object」はほぼ同様のことをいっており、II 「strange thing」も同類であろう（敦煌本「詠神亀」の「道鳥銜牛糞」もこの変奏である）。それに対して、IIIが地上の人間を「牛飼達」と特定し、彼等の亀を食べる算段を聞いて、亀がそれに反発したというのは異色の設定で、後に挙げるインドネシア・ムンドウの浮彫に牛が見られることと関係するかも推定されている。IVで地上の人が亀の姿を誤解して「さらわれていくところだ」とするのは、まさに「根本説一切有部毘奈耶」の「仁等觀彼二鵝共偷一籠」に対応する点注目される。同様のことは、Jatakaの「村の子供たちが見て「二羽のガチョウがカメを棒で運んで行くぞ」と言った。カメは「友だちがわたしをつれて行こうと、そこにいるおまえさんたちにとってなんだというのだ（後略）」という記述と、「五分律」の「諸小兒見皆言。雁銜亀去。雁銜亀去。亀即瞋言。何預汝事。」との対応関係にも見られ、Jatakaと「五分律」がこの説話の古層に位置する資料であることを改めて確認するものである。

ところで、パンチャタントラやジャータカの訳本中、鳥の名前は「Geese」[白鳥]「Ganders」[家鴨]「ガチョウ」などと一定しない。諸本の原語本文に当たっていないので確実なことはわからないが、これは「Hansa」という単語の訳語のようで、ヨーロッパの辞書では「Goose」の

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

みならず「swan」や「flamingo」とも訳されるようである²⁵。よって訳本における鳥名の相違はこれを諸本の違いとしては取り上げないことにした。

六

ここで、パンチャタントラとイソップ物語 (Aesop Fables) の関係について言及する必要がある。辻直四郎氏は「P. 中には少数ながら、いわゆるイソップの寓話との共通起源を想定せざるをえない物語がある」とされつつ、「しかしP. の寓話およびイソップ寓話は個々に発生・移植の歴史をもち、一括して起源の地を決定することはできない」として、その直接関係については懐疑的である²⁶。一方、本稿で取り上げている「亀飛行譚」においてもパンチャタントラと著しい同文性を示すジャータカと、イソップ物語との関係について、千瀉龍祥氏は「イソップ物語の構成要素のどの部門にも、ジャータカから取入れたと思われるもの、またその影響によると思われるもののあることは否めないであろう」として両者の密接な関係を示唆し、「現在のイソップ物語の中で恐らくはジャータカから来ているのであらうと思われるものの著しいものを挙げておく」と十二例の説話題目を列挙され、その中にイソップの「鶴と亀」とジャータカ二一五「雁と亀」が並置されている²⁷。コーウエルによるジャータカの英訳テキストの脚注にも同様の言及があり、これらは古くベンファイの指摘に由来するものであらう。

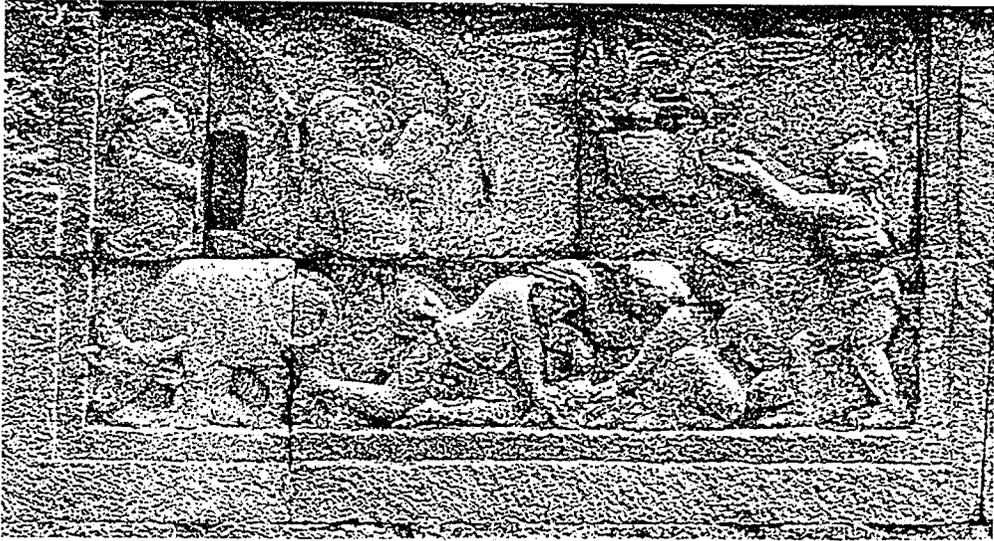


図3 インドネシア・ムンドウの浮彫。画面右上部に二羽の鳥が足で棒を掴んでいる。左手では二人が弓を構えている。(『世界美術大全集 東洋編』第十二巻二一五頁、二〇〇一年小学館)第七章参照

イソップ物語にも、パンチャタントラと同様の複雑な伝本関係があり、その沿革について筆者は近年の小堀桂一郎・松村恒・中務哲郎の各氏の一連のご論考⁶⁾を参照するものであるが、こと「亀飛行譚」に関してはベンファイ以来のパンチャタントラ（この場合はジャータカとほぼ同義）とイソップ物語との「著しい」関係の認定に疑問を抱いている。

近代のイソップ研究の成果、なかんずくペリー (B. E. Perry, 1892-1968) が諸資料を収集編纂したイソップ物語集の中でその中核をなし、散文によるイソップ集成の源流と目されているのが、「アウグスブルク校訂本」(アウグスターナ稿本とも)と称される一群の写本で、その代表的な古写本がミュンヘンはバイエルン国立図書館に蔵される Augustanus Monacensis 564 である。この写本は一三、四世紀のもものとされるが、その祖本は一、二世紀に遡ると考えられ、それはさらにアリストテレスの孫弟子にあたる学者デメトリオス (前三五〇頃―二八〇頃) が編纂したという『イソップ集成』に連なると想像される。イソップ自身については、ヘロドトスの『歴史』巻二・一三四やディオゲネス・ラエルティオスの『ギリシャ哲学者列伝』一・七二の証言によれば、前六一〇年から六〇〇年頃に生まれ、女流詩人サッポールと同時期に活躍したと考えられる。またアリストパネスの『平和』(前四二一上演)や『鳥』(前四一四上演)、プラトンやアリストテレスもイソップと彼の寓話の存在に言及しているから、「プラトンやアリストテレスが著述を行った前四世紀には、イソップの名はすでに寓話作家の代名詞になっていた」とされる⁷⁾。本稿の目的

に於いては、イソップの実在性や当該説話「亀と鷺」が彼の真作かどうかは当面の問題でなく、少なくとも前四世紀にはイソップ寓話が著名であったこと（ジャータカの発生より古いのではないか）、「亀と鷺」はイソップ諸本の中でも「アウグスタブルク校訂本」に含まれているから、イソップ寓話の最古層に属すると思われる、事実、紀元八〇年頃のバブリオス（イソップ寓話の古資料の一つ）にも引かれるところを見ると、この説話が遅くとも紀元前には成立していたであろうこと（ジャータカや「五分律」と同時代、あるいはこれらに先行する）を確認すればこと足りる。

アウグスターナ稿本はシャンブリ（E. Chambry）の校訂と仏訳を経て、現代流布しているイソップ物語は多くこのシャンブリ版を底本としているが、中世のヨーロッパで広く流布したのは、ドイツのシュタインヘーヴェル（Steinowen）が一四七六年あるいは七七年に編纂刊行したとされるイソップ物語であった。これは「十五世紀までの西欧に流布していた各種のイソップ寓話集を集成大成し、編者独自の見地から編纂・構成した大部なもの」（小堀氏桂一郎氏「イソップ寓話」一四六頁）で、室町末期の天草で刊行された『イソポのハブラス』（天草本伊曾保物語）や、江戸期に漢字平仮名交じり文で版行された『伊曾保物語』などの邦訳本の底本はこの系統のものではないかと指摘されている⁸⁰。このシュタインヘーヴェル本の中に、ペリーによれば一世紀後半といわれるバブリウスに由来するアヴィアヌス集（紀元三八〇年頃）の抄出が収められており、その中に「亀と鷺」の説話がある。シュタインヘーヴェル本は各国

語に訳され一四八三年頃には仏訳がなされ、この仏訳を底本としてさらに英訳されたのが、これまた西洋世界に広く流布したウィリアム・カクストン（W. Caxton）の刊行本である⁸⁰。以下に、イソップ物語の代表として、現在流布しているアウグスターナ稿本の邦訳と、中世に流布したシュタインヘーヴェル本由来のカクストン英訳本の邦訳の二種を提示する。

アウグスターナ稿本『イソップ物語』二三〇 亀と鷺

鷺が飛んでいるのを見た亀が、自分も飛びたいと思った。そこで鷺を訪ね、何なりとお礼はするから教えてほしい、と頼んだ。それは無理だと言っても、しつこくせがむので、鷺は亀をつかむと、空高く舞いあがり、岩の上で放した。亀はそこに落下して、割れて死んだ。人間の場合でも、張り合う心からわが身を損なう人が多い、ということはこの話は説き明かしている。

ウィリアム・カクストン版『イソップ寓話集』

アヴィアヌス抄 第二話 亀と鳥たち

分不相応に背伸びしようとする者はかならず不運に見舞われる。次の寓話で明らかのように。亀が鳥たちに言った。「私をこの地上から空中高く持ち上げてくれたら、あなたがたを寶石がいつぱいあるところへご案内します」すると鷺が亀をつかんで、地上が見えないほど高いところへ

運んだ。そして亀にこう言った。「さあ、おまえが約束した宝石を見せてくれ」しかし亀には地上が見えなかったので、鶯はだまされたと知って、鉤爪で亀の腹をぐさりと刺して、殺してしまった。

実際、名声や栄誉を得ようと思う者は、たいへんな苦勞をしなければならぬのである。ゆえに、高く登ったはよいが、後で不名誉で惨めな死に方をするよりも、低い所にいるほうがましであり、安全だということである。世間で言うように、背伸びをすればこけるのだ。

二種のイソップ寓話のうち、前者では、亀をつかんだ鶯が空中で亀を放して墜落死させる理由については何も書かれていないが、後者では、亀が嘘をついたことに対する報復として鶯は亀を刺し殺している。確かに前者のほうが素朴な形であり、後者には構成上の修飾が加えられていると見受けられるが、要するにどちらも、空高く飛ぶ鶯に並ぼうとした亀の無謀な野心が亀自身の身を滅ぼしたことを述べており、がむしやらな向上心や分不相応な思い上がりへの戒めとなっている。ところで、このイソップ物語二種と既に検討したパンチャタントラやジャータカは「著しい」類似関係にあるのだろうか。繰り返すまでもなくパンチャタントラやジャータカの「亀飛行譚」の狙いは無用なおしやべりを戒めることにあり、亀が思い上がって飛行を希望するという設定は全く見られない。またその運搬法は判で押したように「二羽棒型」であったことを考えると、これらと右のイソップ物語との間には文献学的関係は何も見られない

いと言わざるを得ない。勿論、この説話を比較しただけの文字通りの管見で断定するわけにはいかないが、両者が関係するというのは、いささか性急に推進された「物語インド起源説」^②による過剰な期待が生んだ幻想の産物ではあるまいかと想像される。

なお、イソップ物語に關係する資料として筆者が注目するのは、次のようなプリニウス『博物誌』第十卷の記述である^③。亀を空中から落としてその甲羅を割り肉を食べるというある種の鶯の行動が、イソップ物語に所収されたとき寓話の材料になったのではなからうか（詩人のアイスキュロス^④は落下する亀の直撃を受けて死んだという！）。

プリニウス『博物誌』第十卷より

第三の種類の属するものはモルプノスで、ホメロスはまたそれを薄黒いワシとも呼んでいる。これは大きさも力も二番目であり、湖水のほとりに住んでいる。（中略）それはカメを高いところへ運んで行って落としたり甲を割るといふ巧妙な工夫の才をもっている。物語によれば、こうした偶然の出来事が詩人アイスキュロスの死を惹き起こしたという。彼は運命の女神たちによって予言されていたこの種の災難を避けようとして、疑うことなく青天井に頼っていたのである。

七

二羽棒型の亀飛行譚は、仏教美術にも広くその材料を提供し、インド

から東南アジアにかけて造形美術の遺例が残されている。古くはフーシエ (Alfred Foucher) の指摘に始まり、近年日本では湯山明氏の一連の御論考がある⁵⁴⁾。現在の段階で最も浩瀚なものはマリケ・クロツケ氏 (Marjke J. Kloke) のものである⁵⁵⁾。

クロツケ氏は、それまでに報告されてきた「亀飛行譚」の美術作例の文献掲載写真や自身撮影によるものをもとに、明快な線描画を作成して紹介され (図4)、併せて三種類のパンチャタントラ (Panchatantra) のテキストを提示して、地域ごとの画像の相違が、その地域に流布したテキストの相違に起因するものであることを指摘し、様式の展開相を跡づけられた。同氏が報告されたこの説話の美術作例とそこに登場する動物・人間の数をまとめると次のようになる。これはおそらく現時点で判明しているインドと東南アジアにおける作例をほぼ総覧するものである。

- (北インド)
- 1 マトゥラー (Mathura 二・三世紀) 雁0亀1男2
 - 2 ブダガヤー (Bodhi Gaya 五〇〇年) 雁2亀1男2
 - 3 ナーランダ (Nalanda 九世紀) 雁2亀1男2
- (南インド)
- 4 アランプール (Alampur 七・八世紀) 雁2亀1狗1
 - 5 ベラガメ (Belagame 一二から一四世紀) 雁2亀1狗1
- (中央ジャワ)

6 ムンドウ (Candi Mendut 八〇〇年) 雁2亀1男6

7 ソジワン (Candi Sajiwan 九世紀中頃) 雁2亀1男2
(男の内二人は弓を構える。雁は足で棒を掴む)

(東ジャワ)
(雁は足で棒を掴む)

8 ジャユ (Candi Jago 一四世紀中頃) 雁1亀2狗2
(雁が棒の中央を銜え、二匹の亀が棒の両端を銜える)

9 パナトラン (Panatoran 一三四七年) 雁1亀2狗2 (同8)

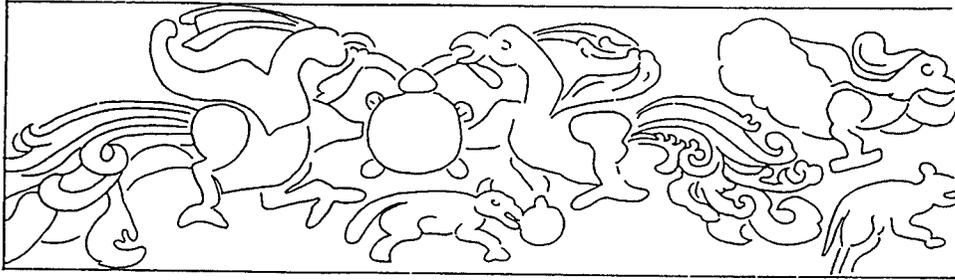
10 ガムバル (Candi Gumbhar 一四世紀後半) 雁1亀2狗1 (同8)

11 パナトラン (Panatoran 一四一五年) 雁1亀2狗2 (同8)

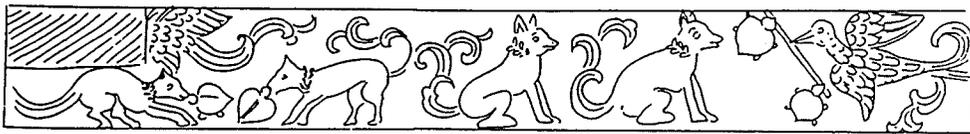
クロツケ氏はこれらの画像に対応するテキストとして、次の三点を紹介されている。

- A the Sanskrit Tantrakhyayika, book1, embossed story 11
- B the Sanskrit Tantrapakhyaana, book1, embossed story 3
- C the Old Javanese Tantri Kamandaka, embossed story 3

A は本稿第五章で引用した1aのことで、古い形のパンチャタントラの一つ。北インドに起源をもつとされ、パーリ語の「亀本生」(Pali Kacchapa Jataka no. 215) は同じ話である。英訳文を見るに、二羽の雁と一匹の亀が登場し、雁からの提案で、亀が棒の中央を銜え、雁が棒の両端を銜え



5. Bellagame c. 12th to mid-14th centuries, after Anand et al. s.a.: pl.18



8. Candi Jago, mid-14th century, after author's photograph

図4 南インド・ベラガメと東ジャワ・ジャゴの浮彫。地上の狗に注意。(クロック氏によるトレース図。Marijke J. Klokke, "The Tortoise and the Geese: A Comparison of a Number of Indian and Javanese Literary and Sculptural versions of the Story", in Lokesh Chandra ed., *The Art and Culture of South-East Asia*, New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 1991, pp. 195)

て運び、地上の声に応じて亀が落下することなど、既に検討した通りである。

Bは、クロック氏が知る限り、地上の人間の代わりに狗 (jacks) が登場する唯一のパンチャントラということで、南インドに流布したテキストであるという。現在ケララ大学の東洋文書館に保管され、一七〇一年の書写奥書を持つ。この系統の古いサンスクリットテキストが、タミルやタイ・ラオス・古ジャワのパンチャントラの源泉になったという。英訳文を見るに、二雁一亀が登場し、ここでも雁からの提案で、亀が棒の中央、雁がその両端を銜えて運ぶのはAと同じであるが、地上には人間の代わりに狗の夫妻が見えて「Look at that crazy tortoise」と声をかけ、その声に反発した亀は落下し狗に食われてしまうという設定がユニークで、狗の登場は少なくとも漢訳経典や日本の用例には全く見られない型式である。

Cは、一八五九年に *Boemen Wanders* により紹介されて以来、「およそ百年にわたりヨーロッパの学者を悩ませてきた」という。なぜなら、それが当時知られていた、どのパンチャントラとも際違った相違を示していたからである。一九五七年 Atola によりBが再発見されて、それがCを始めとしてタミルやタイ・ラオスのパンチャントラに原形態を提供したことが明らかになった。BとCが密接な関係にあることは、亀の飛行譚を例に取れば、人間の代わりに狗が登場すること、雁の飛来した場所が共通すること、などの諸要素により判断できる。ライデン大

学図書館所蔵の二種類の写本 (Or. 4533 と Or. 18673) を利用して作成されたクロツケ氏の英訳文を見るに、それぞれ名前を持つ夫婦者の二雁二亀が登場し、雁の方から移動の提案と移動法の提示があり、二匹の亀は棒の中央を銜え、二羽の雁は棒の両端を銜えて飛行する。それを地上で見かけて声をかけたのは、Bと同じく二匹の狗の夫婦(彼等も名前がある)であるが、このテキストでは彼等は亀達のことを「They are dried cow dung, the abode of dung-beetles」(糞転がしの家である乾いた牛の糞)と誤解している。「牛糞」とするのは敦煌本『詠神亀』とのみ一致し、両者の直接的関係は想定しにくいといえ興味深い現象である。

さて、クロツケ氏が紹介された作例とテキストを通覧するに、まず目に付くのは、地上の人間の代わりに狗が登場する作例があることだ。しかもそれは人間が登場する作例と混在することなく、作例地域はきれいに二つに分かれる。即ち、北インドと中央ジャワの作例は、これまで検討してきたパンチャタントラ諸本と同じく、二羽の雁と一匹の亀による「二羽棒型」で狗は登場しないが、南インドと東ジャワの作例には狗が登場し、さらに南インドでは一匹の狗であるが、東ジャワでは二匹の狗となっている。

狗が登場する作例に対応するテキストとして指摘されたBは、パンチャタントラ諸本中唯一狗が登場し、しかも南インドに流布したテキストとして、南インドの作例が依拠したテキストとの濃厚な関係が想定できるのだが、しかしクロツケ氏も注意するように、テキストBでは狗の夫婦

二匹が登場するが、南インドの作例では狗は一匹しかおらず、テキストと作例が必ずしも正確に対応しているわけではない。同様の状況は、Bから派生して東南アジアに流布したパンチャタントラと思われるテキストCと東ジャワの作例の間にも認められ、テキストCでは亀も夫婦者となり二雁二亀二狗が登場するが、東ジャワの作例では、なんと雁は一匹しかおらず、その雁が棒の中央を銜え、亀の夫婦がそれぞれ棒の両端を銜えるという、パンチャタントラ諸本には全く見られない誠に予想外の移動法を取っている。テキストCには亀が棒の中央を銜える他のパンチャタントラと同様の運搬法が明記されており、これを誤解した結果の表現とは思えず、彫刻作家がテキストCを甚だしく逸脱して想像力を発揮したというよりも、さらに別のテキストの存在が予想されるのである。

こうしたテキストと作例の関係から次のように考えられる。まず、北インドではテキストAのような通例のパンチャタントラをもとに彫刻の制作が行われ、その系統のテキストは遅くとも九世紀の初頭までには中央ジャワに伝播し、かの地の美術制作に利用された。一方、南インドに於いて加えられたと思われるパンチャタントラの改変は、美術作例の年代比定に従えば七・八世紀までには完了しており、それが十五世紀初頭までには東ジャワに伝播し、伝播の過程でさらに変化したテキストが、東ジャワの美術制作に影響を与えたと思われる。クロツケ氏は、南インド文献のさらなる調査が十四・十五世紀の古ジャワの文学と考古の研究に寄与するのではないか、という期待を表明しておられる。

ところで、インドネシア・ムンドウ (Candi Mendut) の作例 (図3) は、日本でも鮮明な写真が公刊されており、最も参照しやすいものであろうと思われ、その図像について付言しておきたい。画面中央上部には二羽の雁が飛行し亀を運んでいる。亀は棒の中央を銜えているが、雁は棒の両端を銜えるのではなく足で掴んで飛んでいる。同じく中央ジャワのソジワンの作例にも同様の表現が見られるが、足で棒を掴むという設定はパンチャタントラ諸本にはなく (テキストB・Cも嘴で銜えること明記する)、これらの作例が依拠したテキストには正確な棒の持ち方が明示されておらず彫刻家の想像に委ねられたのではないかとクロック氏は述べている。画面中央下部で三人の人間が群がり何かを地面に押さえつけているのは、パンチャタントラの記述により、落下した亀を解体しようとする場面だと想像がつくが、画面向かって左手に弓を構えた男が二人おり、その手前に牛が彫られているのは何に基づいた表現なのか不審である。これについてフォーゲル氏 (J. P. Vogel) は「牛飼達」が登場する「ヒト・パディーシャ」の影響を示唆しているが、その場合のテキストの伝承経路は不明で、「ヒト・パディーシャ」には人が亀を弓で射るといふ設定はない。

八

近年の荒俣宏氏らの精力的活動によって、中世から近世の西洋における博物学が展開した魅力的な世界が日本に紹介されてはや久しい。それ

ら奇想天外な「博物学書」の一つが、十七世紀のアタナシウス・キルヒヤー (Athanasius Kircher) 編集により、一六六七年にアムステルダムで出版された「シナ図説誌」(略称 China Illustrata) である。キルヒヤーについては、日本でも彼の生涯と著作の概要を紹介する本が翻訳され筆者もそれに接した³³⁾。キルヒヤーは一六〇二年ドイツに生まれジェスイット教団に入り、各地を遍歴した後一六三五年にはローマに行き、以後一六八〇年に同地で亡くなるまでヨーロッパを出たことはない。彼は典型的なルネサンスの万能学者の一人で、様々な学芸諸分野に手を染め四十種近くの著作をものしたという。中でも「シナ図説誌」は中国・インド・チベット・ネパール・モンゴルなどの地域について、ヨーロッパで初めて広く資料を集めた包括的な記述として、出版されて数十年間はヨーロッパ人の東洋観に大きな影響を与えた。澁澤龍彦氏の言葉を借りれば、「一種の万能の学者であり、旺盛な百科全書的アマチュア精神の持ち主であって、マニエリスム後期のもっとも特徴的な知識人のひとり」ということになる³⁴⁾。

その「シナ図説誌」も各地で翻訳されるなどの流布を見たものの³⁵⁾、しかし、キルヒヤー自身は中国を実見したわけではなく、ほとんどすべて伝聞に基づいた情報を彼自身の百科体系的体系により編纂したもので、本書出版の前後に実際の見聞に基づく中国関係の書物が次々と刊行されたため、「シナ図説誌」は「全体として荒唐無稽の、無益な地誌に成り下がった」のである³⁶⁾。

さて、読者を魅了してやまない興味深い著作を多数刊行されている中国文学者の中野美代子氏はこの『シナ図説誌』に注目され、特にそこに収められた奇妙な図像について考察を廻らしておられる⁴⁵。筆者が驚いたのは、その中に「飛翔する亀」の図が紹介されていることである(図5・6)。画面中央上部には一匹の亀が四肢を伸ばして空中を滑空しており、その横につたない漢字で「緑毛」とある。画面中央下部には大きな亀が一匹地をはっており、その上方に漢字の「亀」に似た文字が書かれている。この図について中野氏は「この緑毛亀が空中を飛翔する俗説があるなどは、どこにも書いていない。いったいキルヒヤーは、どこから空飛ぶ亀のネタを仕入れたのであろうか。」と述べられた⁴⁶。中野氏は何も言及されないが、画面をよく見ると「飛翔」中の亀の左右に確かに一羽ずつ鳥が飛んでいることが見て取れる。さらに画面下部に書かれた漢字の「亀」に似た奇妙な文字の左右にも、やはり鳥のようなものが一羽ずつ書かれているではないか⁴⁷。差し渡された棒こそないもの、どうやらこの図の背景にはインド伝来の「亀飛行譚」が控えているようだ。既に述べたように、パンチャタントラはそのアラビア語訳を源流としてヨーロッパ各国語に翻訳されており、ヘブライ語訳やラテン語訳を経て一四八三年のドイツ語訳以降欧州に広汎に流布していたから、一六六七年刊行の『シナ図説誌』にその説話が描かれても不思議ではない。それでは、キルヒヤーはパンチャタントラの説話を念頭に置いて直接この図を制作したのかというと、おそらくそうではなく、何らかの先行資

「亀が空を飛ぶ話」の生成と展開

料を利用したと思われるが、そうした資料はいまだ管見に入っていない⁴⁸。なお「緑毛」は中野氏も指摘されるように甲羅にふさふさと緑藻を生やした亀のことで、中国では現在も縁起の良いものとして珍重されている⁴⁹。もう一つ、『シナ図説誌』に見られる奇妙な「漢字」表現は、武田雅哉氏もつとに注目されており⁵⁰、この「亀」文字のごときをみると、それぞれに独自の説話を背景にもつものが他にも隠れている可能性がある⁵¹。

最後に、本稿の考察の結果を時系列にそってまとめておく。二本の棒の両端を雁が銜え、その中央を亀が銜えて運ばれていくという「亀飛行譚」は少なくとも紀元前にはインド北部で成立していた。それは釈迦の前生譚やおしゃべりを戒める教訓として、紀元前後にはジャータカに少し遅れてパンチャタントラの原型に収録され、さらに律経典や譬喩経典に流用されたものが漢訳されて七世紀の中国に将来された。この説話の構造における「二羽棒型」から「一羽棒型」(『今昔物語集』や日本の昔話など)への変化は、従来言われているような「五分律」所収話の誤解や日本の民間伝承により生じたものではなく、六朝以前から「鶴亀一対志向」を持っていた中国において既に、「鶴(鶴)」「亀」が登場する『旧雜譬喩経』や『法苑珠林』にもとづき、「鶴亀一羽棒型」の説話が形成されていたことを、宋代米芾に詩により確認した。日本へは「二羽棒型」と「一羽棒型」の説話は並んで流布していたらしく、『注好選』は前者を、『今昔物語集』『塵袋』は後者の系譜に属し、昔話には両系が見ら

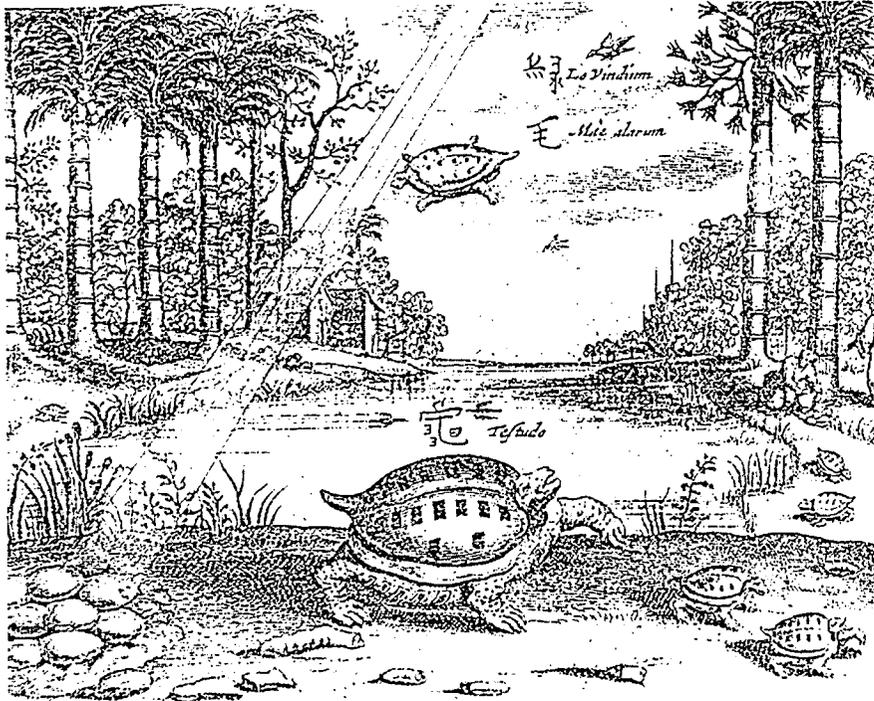


図5 アムステルダム版『シナ図説誌』の「亀飛行図」。画面下の大亀の上に傍書された「龜」字に注意。
 (ゴドウィン著川島昭夫氏訳『キルヒャーの世界図鑑—よみがえる普遍の夢』、一九八六年工作舎)

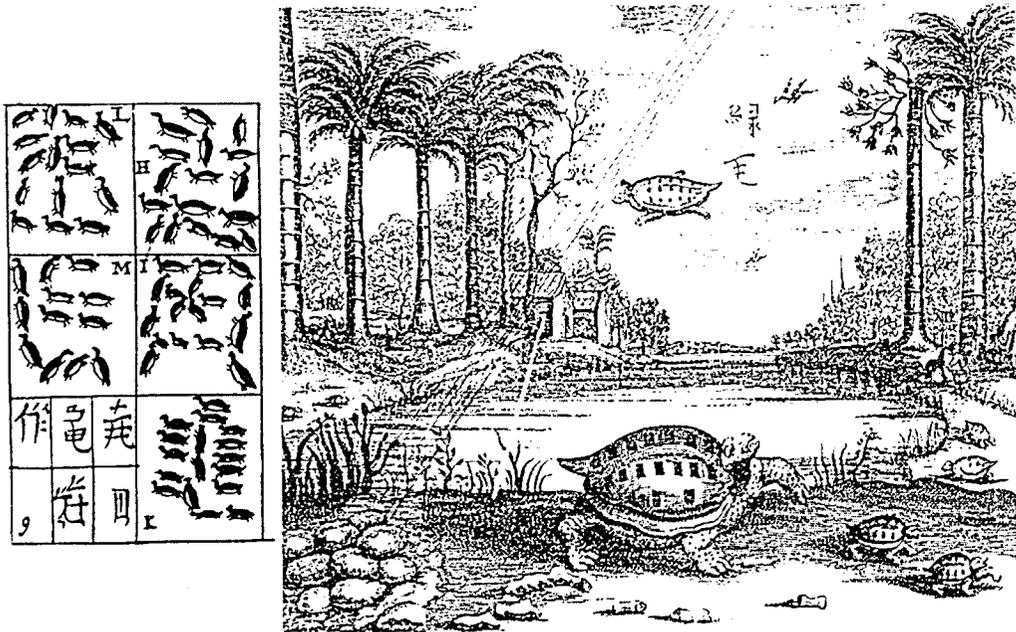


図6 アントワープ版『シナ図説誌』（実際にはこれもアムステルダムで刊行されたという）の「亀飛行図」と「古代漢字書体」。大亀の上の傍書が無いことに注意。(荒俣宏氏『バロック科学の驚異』ファンタスティック・ダズン10、一九九一年リプロポート)

れる。一方、パンチャタントラは盛んに翻訳されてアラビアやヨーロッパに流布し、「亀飛行譚」はハンス・ザックスやラ・フォンテーヌの愛用するところともなり、十七世紀中頃のキルヒヤーの『シナ図説誌』にも姿を見せる。しかし、時に「亀飛行譚」の「類話」として指摘される『イソップ物語』の「驚と亀」は、その本文を比較したところ、説話の主旨ならびに構造の相違から、文献学的交渉はないことが判明した。インド南部や東南アジアへもやはりパンチャタントラと共に持ち込まれ、各地の仏教遺跡の題材となつているが、各地に流行した独自のパンチャタントラの言説を反映して独特の図像を示すものもある。

以上、敦煌資料の考証に端を発して、「亀飛行譚」の展開を諸先達に導かれつつ追いかけてみると、この説話がかくも広汎な地域へ伝播していることに改めて驚きを覚える。さらに、こうした説話を持ち運び、記し、訳し、改編し、出版し、読み、語り、描き、眺め、彫つてきた人間の長い数奇な営みに心打たれるのである。

(付記) 本稿をなすにあたり、西域文献写真の閲覧をお許し下さいました
羽田記念館当局と、資料・参考文献をご教示・ご恵与下さいました
青木自由治・落合俊典・肥塚隆・松村恒・宮治昭の各先生に厚く御礼申し上げます。

付載資料(パンチャタントラ諸本とジャータカ)

I b (小本、田中於菟弥・上村勝彦両氏訳『パンチャタントラ』)

第一三話 亀と二羽の白鳥

ある池にカンブグリーヴァという亀がいた。彼にはサンカタとヴィカタという二羽の白鳥の友達がいて、この上なく仲がよかった。二羽の白鳥は彼と一緒に池の岸に坐つて、多くの聖仙たちの話を語り、夕暮時に自分の巢に帰つていった。こうして時が経つたが、ある時、雨が降らなかつたために、池は次第に乾燥した。そこでこの不運に苦しんだ二羽の白鳥が亀に言った。「ねえ君、この池は泥だけしか残っていない。君は一体どうなるんだ。僕たちの心は不安でいっぱいだよ」それを聞いてカンブグリーヴァが言った。「ああ、水がなくては、もう生きていられないよ。だがなにか方法を考えなくてはいけない。こんなことが言われている。不遇の時にも勇気をすてぬものは、常に勇氣によつて脱出の道に達する。

あたかも海上において難破しても、船乗りが渡渉せんとする如く。
さらにまた、

智者は常に友のため縁者のために、不幸が生しても努めて力をつくす。
こはマヌの言である。

それ故なにか堅い綱か軽い木片をもつてきて、沢山の水を湛えた池を探してくれ給え。そうしたら、私はその木片の真中を歯でくわえているから、君たちはその木片の先端の部分をつかまえて、私と一緒にその池

に運んでくれ給え」二羽の白鳥は言った。「よし、その通りにしてやろう。だが、君は沈黙の戒を守らねばならぬ。さもないと君は木片から落ちてしまうからな」その通りに事が運んでいった時、カンブリーヴァは、下にある一つの町を見た。町の人々はそんな風に(亀が)運はれていくのを見て驚いて言った。「やあ、車輪みたいなものが、二羽の鳥に運ばれているぞ、見てらん、見てらん」彼らの叫び声を聞くと、カンブリーヴァは言った。「何ぞそんなにわめくのぞ」と、言いつつ言葉半ばで落ち、そして町の人々に粉碎された。

「だから私は言つのです。この世で、幸運を願う友達の言葉に従わぬのは、愚かな亀の如くに木片から落ちて死ぬ」と。

10 (広本) A. W. Ryder, *The Panchatantra*, *The University of Chicago*

Press, 1925.)

SHELL-NECK, SLIM, AND GRIM

In a certain lake lived a turtle named Shell-Neck. He had as friends two ganders whose names were Slim and Grim. Now in the vicissitudes of time there came a twelve-year drought, which begot ideas of this nature in the two ganders :

"This lake has gone dry. Let us seek another body of water. However, we must first say farewell to Shell-Neck, our dear and longproved friend. When they did so, the turtle said : "Why do you bid me farewell ? I am a water-dweller, and here I should perish very quickly from the scant supply of water and from

grief at loss of you. Therefore, if you feel any affection for me, please rescue me from the jaws of this death. Besides, as the water dries in this lake, you two suffer nothing beyond a restricted diet, while to me it means immediate death. Consider which is more serious, loss of food or loss of life. But they replied : "We are unable to take you with us since you are a water-creature without wings. Yet the turtle continued : "There is a possible device. Bring a stick of wood. This they did, whereupon the turtle gripped the middle of the stick between his teeth, and said : "Now take Grim hold with your bills, one on each side, fly up and travel with even flight through the sky, until we discover another desirable body of water. But they objected : "There is a hitch in this fine plan. If you happen to indulge in the smallest conversation, then you will lose your hold on the stick, will fall from a great height, and will be dashed to bits. "Oh, said the turtle, "from this moment I take a vow of silence, to last as long as we are in heaven. So they carried out the plan, but while the two ganders were painfully carrying the turtle over a neighboring city, the people below noticed the spectacle, and there arose a confused buzz of talk as they asked : "What is this cartlike object that two birds are carrying through the atmosphere? Hearing this, the doomed turtle was heedless enough to ask : "What are these people chattering about ? The moment he spoke, the poor simpleton lost his grip and fell to the ground. And persons who wanted meat cut him to bits in a moment with sharp knives.

“And that is why I say :

To take advice from kindly friends,....

and the rest of it.~ And Constance continued :

Forthought and Readywit thrive ;

Fatalist can't keep alive.

“How was that?~ asked Sprawl. And she told the story of...

II 『カタータニンとカーガン』(C. H. Tawney, N. M. Penzer, The Ocean of Story, vol. V, 2nd rev. ed. London, 1926 ; repr Delhi :

Motial Banarsidass)

84G. The Tortoise and the Two Swans

For there was in a certain lake a tortoise, named Kambu-griva, and he had two swans for friends, Vikata and Sankata. Once on a time the lake was dried up by drought, and they wanted to go to another lake ; so the tortoise said to them : “Take me also to the lake you are desirous of going to.~ When the two swans heard this, they said to their friend the tortoise : “The lake to which we wish to go is a tremendous distance off ; but, if you wish to go there too, you must do what we tell you. You must take in your teeth a stick held by us, and while travelling through the air you must remain perfectly silent, otherwise you will fall and be killed.~ The tortoise agreed, and took the stick in his teeth, and the two swans flew up into the air, holding the two ends of it. And gradually the two swans, carrying the tortoise, drew near that lake, and were

seen by some men living in a town below ; and the thoughtless tortoise heard them making a chattering, while they were discussing with one another what the strange thing could be that the swans were carrying. So the tortoise asked the swans what the chattering below was about, and in doing so let go the stick from its mouth, and falling down to the earth, was there killed by the men.

III 『ユーバーニーシャ』(金倉田照・北川秀則両氏『ユーバーニーシャ 処世の教え』岩波文庫)

マガダ地方にフットロートバラという名の池がございます。そこに長の間二羽の白鳥が住んでいました。またその友達の亀も住んでいました。さて漁師達がそこへやって来て次のように言いました。「俺達は今日ハジメ泊して、明朝魚や亀などを取ってやさい」。これを聞くと亀は白鳥に言いました。「白鳥君、漁師の話を聞いたらどう。今僕はどうすればいいだろうか」。白鳥は「まあ、一度確かめて見るハジメだ。そしてその上で適当な措置を講ずるハジメだ」と言いました。亀は申しました。「それは良くない、良くない。何となれば僕はこの池で実際に災難を見ているからだ。次のうちにも言われている。(中略)だから事が起った時に臨機の措置をとるべきだ。(中略)だから僕が今日中に別の池に着けるように方法を講じてほしいのだ。君が陸の上を歩いて行ったのでは無事に着けるわけはない」と言ったので、白鳥は「僕も君達と一緒に空路で行ける方法を講じてくれ」と言いました。白鳥は「そんな方法があるわけは

ないじゃないか」と言いました。亀は次のように申しました。「君達の嘴で一本の棒切をくわえ、それに僕も口でぶら下るわけだ。そうすれば君達の嘴の力で僕だって空路を行くことが出来るよ」。白鳥は、「その方法は可能だ。しかし、(中略)それに僕達が君を運んでいるのを見れば、人間共が何か言うにきまつている。それを聞いて君が受け答えをすれば、その時は君の最後だ。だから君はどうあつてもここにいた方がいいよ」。亀は、「僕が馬鹿だとも言うのかい。僕は何も言ったりはしないよ」と言いました。そこで亀の言ったことが実行に移されましたが、白鳥のくわえている棒切れにぶら下がって飛んでいる亀を見ると、牛飼達は皆後から追い駆けて来て次のように言いました。すなわちある者は、「亀をここで煮て食おうぜ」と言い、ある者は、「家へ持って帰った方がいいぜ」と言いました。亀は怒って前の決心を忘れ、「お前達は灰でも食え」と言いました。ところが言った瞬間、亀は落ちて牛飼達に殺されてしまったのでございます。それで私は、「善かれと願う友の語に、云々」と申し上げたのでございます。

IV 『カリラとティムナ』(菊池淑子氏訳『カリラとティムナ アラビアの寓話』(平凡社東洋文庫三三一))

ある泉に、二羽の家鴨と亀が棲んでいました。彼らはみんな仲のいい友達だったんです。あるとき泉の水がほとんど涸れつきそうになりました。二羽の家鴨は、泉を捨てて何処か他所に移らなければならぬと考

えました。そして亀に、「あなたの上に平和がありますように。ではさようなら」と暇乞いをしました。すると亀は、「滅水していくのは、私のようなものにも堪え難いことです。水がなくては生きることができませんから。なにかいい方法を考えて、私も一緒に連れて行ってください」と頼みました。「僕たちがあなたを連れていく途中、だれかがあなたを見て言葉をかけても、決して返事をしないとという条件を承諾してくださいれば、お連れしてもいいですが」「分かりました。しかし今おっしゃったのはどんな方法ですか」「あなたが棒切れの真中を口にくわえ、僕たちはそれぞれ両端を口にくわえるんです」亀はなるほどと感心しました。二羽の家鴨は亀を連れて飛び立ちました。はたせるかな、それを見た人びとは、口々に言いました。「見給え、あの奇妙なさま、二羽の家鴨のあいだに亀がぶら下がって、さらわれていくところだ」「くやしいだろう」亀は思わず口答えしました。その拍子に地面に転がりおちて死んだということです。

ジャータカ(Jataka no 215、中村元氏監修・補註、前田専学氏訳『ジャータカ全集3』一九八二年春秋社)

これは、師がジャータ林に滞在しておられたとき、コーカーリカについて語られたものである。このことは「マハータツカーリ前生物語」において明らかになるであろう。

そのとき、師は、「修行僧たちよ、コーカーリカが話をしたために破滅

したのはいまに限ったことではない。前生においても破滅したのだ」と言つて過去のことを話された。

むかし、パーラーナシーでブラフマダッタ王が国を治めていたとき、ボーディサッタは大臣の家に生まれ、成人して王の聖事と俗事の顧問官となつた。さて、この王はたいへんおしゃべりであつた。かれがしゃべり出すと、他の人々が口をはさむ機会がなかつた。ボーディサッタは、かれのこうしたおしゃべりをやめさせる方法はないものかと考えていた。

ちようどそのころ、ヒマラヤ地方のある池にカメが住んでいた。二羽の若いガチョウがえさを求めて飛んできて、かれと知り合いになつた。かれらはいへん親しくなり、ある日、「二羽は」カメに言つた。「カメさん。わたしたちの住居はヒマラヤのチッタクータ山腹のカンテヤナ(黄金)の洞穴にあつて、とてもよい所ですよ。あなたもわたしたちと一緒に来ませんか?」「わたしはどうしたら行けるでしょう?」「わたしたちがあなたをつかんで行きましょう。もしあなたが口をつぐんで、だれにもなにもしゃべらないでいられるのならね」「つぐんでいきますとも。わたしをつかんでつれて行ってください」

かれらは「よろしい」と言つて、一本の棒をカメにかませて、自分たちはその両端をかんで空中に飛びあがつた。カメがこのようにガチョウたちにつれられて行くのを村の子供たちが見て、「二羽のガチョウがカメを棒で運んで行くぞ」と言つた。カメは、「友だちがわたしをつれて行こうと、そこにいるおまえさんたちにとってなんだというのだ、悪童ども

め!」と言いたくなり、ガチョウたちが速い速度でパーラーナシーの町にある王宮の上空にさしかかつたとき、かんでいた棒を放して、広々とした中庭へ落ち、二つに割れてしまつた。「カメが広々した中庭へ落ちて二つに割れてしまつた」とひと騒ぎがおこつた。王はボーディサッタをつれ、大臣たちを従えてその場所にやつてきて、カメを見て、ボーディサッタにたずねた。「賢老よ。いったいどうしてこいつは落ちたのか?」「ボーディサッタは、「わたしは王に忠告したいと長いあいだ願つて、方法を考へてきた。このカメはガチョウたちと親しくなつたにちがいない。かれらは『こいつをヒマラヤにつれて行つてやろう』と棒をかませて空中に飛びあがつたにちがいない。しかし、カメはだれかのこの言葉を聞いて、だまつていられなくなり、なにか言おうとして棒を離してしまつたにちがいない。そこで空から落ちて死んでしまつたに相違ない」と考へて、「大王よ、あまりに饒舌で、際限なくしゃべるものどもは、こういう苦しみにあうのでございます」と言つて、つぎの詩をとなえた。

カメは言葉を發して、
自分自身を殺してしまつた。

棒にすっかりつかまつていたのに、
自らの言葉で殺された。

これを見て、
人々のなかで努力の最もすぐれたものよ、
よい言葉を語るべきである。

あまり長く語るべきではない。

あなたは見ている。

しゃべりすぎて、カメが不幸におちいったのを。

王は、「わたしのことを言っているのだな」と気づいて、「賢老よ、わたしのことを言っているのですね」と言った。ボーデイサッタは、「大王よ、あなたのことであれ、だれかほかの人のことであれ、度をこえてしゃべるものはこのような不幸におちいるのです」と説明した。王はそれ以来「言葉をつつしんで、あまりしゃべらなくなった。師はこの話をされて、「過去の」前生を「現在に」あてはめられた。「そのときのカメはコーカリーカであり、二羽の若いガチョウは二人の大長老であり、王はアーナンダであり、賢い大臣は実にわたくしであった」と。

註

- (1) その沿革については、落合俊典氏「羽田亨稿《敦煌秘笈目録》簡介」（郝春文氏主編『敦煌文献論集』所収、二〇〇一年遼寧人民出版社）に詳しい。
- (2) 徐俊氏纂輯『敦煌詩集殘卷輯考』（二〇〇〇年、中華書局刊）により、『法藏敦煌西域文獻』6（一九九八年上海古籍出版社）の二二〇頁影印で確認した。
- (3) 周一良氏「跋敦煌写本海中有神龜」。初出は『現代仏学』第一卷第五期一九五一年。後に同氏『唐代密宗』（上海遠東出版社、一九九六年）に所収。本稿での引用は後者による。なお、項楚氏『敦煌詩歌導論』（二〇〇一年、巴蜀書社）一一六頁にも「詠神龜」と周氏論文の紹介があり、同氏『魏晉南北朝史論集』（中華書局一九六三年十二月第一版）に収入とあるが、手元の周一良氏著『魏晉南北朝史論集』（北京大學出版社一九九七年三月）

には見あたらない。

- (4) その理由については、増田良介氏「今昔物語集卷五第二四：亀、鶴の教を信ぜずして地に落ち甲を破る語」（別冊「行動と文化」二、一九九四年六月）の注(11)を参照。ここでは増田氏が『旧雜譬喻經』を引用した『法苑珠林』につけられた点に従う。なお同じ説話を扱われた池上洵一氏の「中世説話文学―その新しき表現―」（『国文学解釈と鑑賞』第五八卷一二号、一九九三年一月）では大正蔵の点によっておられるようで、増田氏の解釈と相違する部分が生じている。

- (5) 『書道全集15』（昭和四一年平凡社）による。「全宋詩」卷一〇七七（北京大學出版社）にも所収。米芾については、『書論』第一号（一九七七年）に「特集 米芾と英光堂帖」があるが、提出詩の典拠については言及されない。中田勇次郎氏「米芾」（二玄社一九八二年）は未見。

- (6) 今野達氏「東寺觀智院本「注好選」管見―今昔研究の視角から―」（『国語国文』第五二卷第二号、昭和五八年二月）。

- (7) 池上氏前掲注(4) 論文

- (8) 増田氏前掲注(4) 論文。これは、通常見過ごされがちな一言半句から、説話編者の微細な心理の動向を追跡しようとする好論で新鮮な驚きを覚えるが、「五分律」の曖昧性から一羽棒型の説話が生じたとされるなど、首肯できない点もある。「五分律」では二カ所にわたり「二雁」と明記しており、どのように「曖昧」なのか腑に落ちない（もつともこれは筆者が無意識のうちに二羽型の予見に染まっているためであろうか）。

筆者はむしろ『旧雜譬喻經』に注目する。この経では鳥の数を明記せず、運搬法も「鵠啄銜之」とあるから、自然に読めば、鳥が直接亀を銜えていると解釈できる。また落下の原因も、いくら亀がしつこく話しかけたとはいえ、鶴がそれに答えたためであり、落下の責任が折半されている。この話に、鳥と亀が一本の棒を銜えあうという要素を加味すれば、即米芾が詠んだ詩と同型の説話になる（米芾の詩にいう「報汝慎勿語」は、その内容が一羽棒型である以上、鶴亀どちらの発言ともとれ、落下の原因を亀に押しつけ一方的に亀の落ち度を強調するようなことはしていない）。

もう一つ、『旧雜譬喻經』の鳥名「鵠」について、『世説新語』に付注した梁の劉峻（劉孝標）の「弁命論」（『文選』卷第五十四）には「朝秀晨

終、亀鶴千歳、年之殊也」とあり、その李善注に「養生要論曰、亀鶴寿千百之數、性寿之物也」とあるが、同じく『文選』卷第二十一郭景純の「遊仙詩」にある「借問蜉蝣輩、寧知龜鶴年」の李善注には「養生要論曰、龜鶴寿有千百之數、性寿之物也」とあり、どちらの本文に対しても、李善は『養生要論』の同一箇所を引用したと思われるが、「鶴」と「鶴」が入れ替わっている。また「莊子」「庚桑楚」の「越雞不能伏鶴卵、魯雞固能矣」に対して唐陸德明の「釈文」は「鶴本亦作鶴」とする。白川静氏「字統」三二三頁には、賈誼の「惜誓」の記述により「また鴻鶴の千歳なるものは、その色純白、胎産であるとするなど、靈鳥として扱われる」とする。これらのことから、「鶴」と「鶴」には、色が白い長寿の靈鳥であるなどの共通項があり、一方、六朝以来、長寿の象徴として「龜鶴」と併称する習慣が発生していることから、少なくとも『法苑珠林』が編集された唐の時代には「鶴」から「鶴」へと容易に転換される傾向があったのではないか。「旧雜譬喻經」を引用する『法苑珠林』のみが「鶴」とする背景に、そうした状況を想定したい。よって、話型の類似「鶴」「鶴」の互換性の二点より、「二羽棒型」「鶴龜」対志向」の説話の原拠に「旧雜譬喻經」を措定しておく。

(9) 南方熊楠氏「亀の甲」(『民俗学』二卷九号昭和五年九月、『南方熊楠全集4』所収)。日本の昔話とは例えは次のごとくで、亀甲紋の由来譚であることと、雁一羽亀一匹のいわゆる「二羽棒型」であることが注目される。ただし、日本の昔話すべてが「二羽棒型」ではなく、「二羽棒型」の用例も多数挙げられている。

雁と亀 昔々、亀の背中の甲は二枚板のやうにつるつるしてゐた。ところが亀は毎日水から出て岩の上にあがり、お天道様を拝んで、空へ昇つて見たいと念じた。お天道様もかはいさうに思つて、御使ひを下された。その御使ひのいふには、これこれ亀よ、お前の願ひをかへて連れて行つてやるから、天に昇つて私がよしといふまでは、決して目を開いてはならぬぞといつて、一本の藁しべをくはへさせ、亀をぶら下げて天に向つて飛んで行つた。それなのに亀は大切な言ひつけを忘れて、中途でちよつと目をあけて見たものだから、目がまはつて咬

「亀が空を飛ばす話」の生成と展開

へてゐた藁しべをつい離した為に、空から墜ちて岩の上で背中を打つて、大切な甲をちんちんに割つてしまつた。天の御使ひは驚いて降りて来て、そこにあつた藁をとつてべるべると結はへつけた。それから後、亀の甲は、あんなに澤山の継ぎ目が残ることになつたのださうだ。(『日本昔話集成』巻一「六四 雁と亀」角川書店昭和十五年刊)

(10) Theodor Benfey, Panchatantra : fünf Bücher indischer Fabeln, Märchen, und Erzählungen: aus dem Sanskrit-Übersetzt mit Einleitung und Anmerkungen. Hildesheim: George Olms, 1966 上記は参考文献書誌を付加した復刻版で、原本初版は一八五九年刊。パンチャタントラと各種説話の関連を指摘した先駆的研究として知られる。またパンチャタントラの本文校訂の分野では、ヘルテル (Johannes Hertel) の一連の業績が顕著である(注(11)・注(12)参照)。パンチャタントラの成立問題ならびに諸本の状況は、辻直四郎氏「サンスクリット文学史」(岩波全書二七七、岩波書店一九七三年)一五七頁から一六七頁、田中於菟弥・上村勝彦両氏「パンチャタントラ」(アジアの民話12、大日本絵画昭和五五年)の「解説」を参照するに、前者は「今かりにTKh(パンチャタントラの古態を残すというPanchakhyāika—引用者注)の制作年代をおよそ300A. D.と仮定しようならば、Ur-Pt. (Pt.の原形—引用者注)の年代はこれより若干古いものと考えられる」とし、後者は「タントラーキヤ—イカ」の年代を二世紀頃と仮定すれば、原本の成立年代はこれよりやや古いものと思われる」とされて、Ur-Pt.の成立をおよそ二・三世紀とみておられるようであるが、後者は続けて「従つて原本の成立は西紀一世紀頃から六世紀頃の間と見るべきであらう」とUr-Pt.の成立時期に五百年もの幅を持たせており困惑を覚える。TKh.の成立にして、パラヴィー語(中期、ペルシヤ語)に訳されたパンチャタントラが出現する五七〇年頃以前には成立していたことは確かであろうけれど、それがどのくらいさかのぼるものか、明確な記述に接することができなかった。ハンス・ザックスはその作品「寓話集」(一五四八年)の中に本話を引くことが、松村恒氏「Analecta Indica」(『親和女子大学研究論叢』第二八号、一九九五年二月)に報告されている。その翻訳を見るに「二羽の鷹と一匹の亀が登場し、運搬法は明記されないが、「君の口で棒を銜えなさい」

とあるから「二羽棒型」と思われ、かつ地上の声に応じて亀が口を開き落下するので、パンチャタントラの古く形態とされる *Tantrakhayika* (後掲注(13)のクロック氏論文所載の英訳文による)と共通する。ただし細かく見ると、『萬話集』では地上の人は「見ろよ、自慢げに亀があそこ空中を飛んでいるぞ」というのに対し、*Tantrakhayika*では「あの空中を運ばれてゆく車輪のようなものは何だ」と地上の人が疑問を呈し、「亀が私は亀だ」と答えて落下する点が異なっている。地上の人の誤解に対し「私は亀だ」と反応するのは漢訳經典には見られず、敦煌本『詠神亀』に一致する点興味深々。

- (12) 松村恒氏『*Analecta Indica*』(『親和女子大学研究論叢』第二十五号、一九九二年二月)。同氏『*Analecta Indica*』(『親和女子大学研究論叢』第二十六号、一九九三年二月)には「カメの空中飛行」西藏テクストが掲載され、「意外にも通常考えられている学説とは逆に、漢文の方が却って西藏文よりも膨らんでいる事実が認められた」と注意を喚起している。同氏『*Analecta Indica*』(『親和女子大学研究論叢』第二十八号、一九九五年二月)にはノース(Thomas North)の『モーニの人間道』(*The Moral Philosophie of Domi*, 1570)所収の「カメの空中飛行」が翻訳されている(田中由美子氏と共訳)。文飾が多いが典型的な「二羽棒型」(二羽の鳥と一匹の亀が登場し運搬法を明記)で、地上の人間でなく他の鳥たちがからかう点は特異である。同氏『*Analecta Indica*』(『親和女子大学研究論叢』第三二号、一九九九年二月)では新日本古典文学大系所収の『注好選』や湯山明氏の研究(後掲注(34))についてコメントがある。その他、松村氏は「世界を駆け巡る物語―東西交渉の一側面―」(『親和フォーラム』一三、一九九一年三月)、『プリンス通信』第二十六号(一九九九年五月)・第二十六号(二〇〇〇年一月)などで、この説話について言及しておられる。

(13) 諸本の選定にあたっては、注(11)・(12)に挙げた、辻直四郎氏「サンスクリット文学史」・田中於菟弥・上村勝彦両氏「パンチャタントラ」・松村恒氏『*Analecta Indica*』(『親和女子大学研究論叢』第二十五号、一九九二年二月)を参考にし、なかならず「パンチャタントラ」の「解説」と、それが依拠しているエジヤントン(H. Edgerton)の「パンチャタントラ系統図」(同書口絵写真)による。

- (14) Marjke J. Klokke, "The Tortoise and the Geese: A Comparison of a Number of Indian and Javanese Literary and Sculptural versions of the Story", in Lokesh Chandra ed., *The Art and Culture of South-East Asia*, New Delhi: International Academy of Indian Culture and Aditya Prakashan, 1991, pp. 181-198. *Tantrakhayika*の本文はクロック氏は、次のヘルテルの校訂本に拠る。Hertel, J. 1915 *The Panchatantra: a collection of ancient Hindu tales in its oldest recension, the Kashmirian*, entitled *Tantrakhayika*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press, 1915 [Harvard Oriental Series 14].

- (15) A. W. Ryder, *The Panchatantra*, The University of Chicago Press, 1925. 中国語訳は『季羨林文集』第十六卷(一九九六年江西教育出版社)所収。
 (16) C. H. Tawney, N. M. Penzer, *The Ocean of Story*, vol. V (2nd rev. ed. London, 1926; repr. Delhi: Mohal Banarsidass)

(17) 本文は金倉田照・北川秀則両氏「ヒトローパデーシャ 処世の教え」(岩波文庫、一九六八年岩波書店)による。

- (18) 引用する本文は、菊池淑子氏訳「カリラとディムナ アラゴアの寓話」第一章「亀と二羽の家鴨」(東洋文庫三三三、昭和五三年平凡社)

(19) 千鴻龍祥氏「ジャータカ概観」補訂版(パドマ叢書2、一九七二年、鈴木学術財団)一六六頁を参照した。また同じく千鴻龍祥氏の「改訂増補 本生経類の思想的探究」(昭和二十九年東洋文庫初版刊、昭和五三年山喜房仏書林改訂増補版刊)一四頁では、バルハット(Bharhut)の欄楯に浮彫された本生譚などから、「従って本生談の初めに出来たのは、大凡世紀前三世紀終り頃」とされ、「少くも同二世紀初頃には、相当沢山の本生談が出来て居た」とされる。千鴻氏は「根本パンチャタントラ」の成立を二世紀中頃から四世紀初めとみておられる(「ジャータカ概観」一六六頁)から、ジャータカが先行することになる。ただ、当時流布していた民間説話をそれぞれが独自に取り込んだ可能性もあるから、パンチャタントラが直接ジャータカを引用したかどうかは断定できない。

(20) 引用する本文は、中村元氏監修・補註、前田専学氏訳註「ジャータカ全集 3」(一九八二年春秋社)所収のものによる。その他の邦訳として、『南伝大藏経』十巻小部経典八所収「二二五 亀本生物語」がある。英訳は、

- B. Cowell (ed), *The Jataka or stories of the Buddha's former births*, 6 Vols. Cambridge: Cambridge University Press. [First edition 1895-1913] を参照した。
- (21) 前掲注(19)の干潟龍祥氏「改訂増補 本生経類の思想史的研究」三九頁
- (22) 前掲注(19)の干潟龍祥氏「改訂増補 本生経類の思想史的研究」四三頁
- (23) 前掲注(19)の干潟龍祥氏「改訂増補 本生経類の思想史的研究」四九頁
- (24) J. P. Vogel, *The Goose in Indian Literature and Art (=Memoirs of the Kern Institute no. II)* (Leiden: E. J. Brill, 1962), 1p
- (25) 辻氏前掲注(11)「サンスクリット文学史」一六六・一六七頁
- (26) 干潟氏前掲注(19)「ジャータカ概観」一七〇頁
- (27) イソップ物語を概観するには、小堀桂一郎氏「イソップ寓話 その伝承と変容」(講談社学術文庫、二〇〇一年講談社、初刊は中公新書、一九七八年中央公論社)、中務哲郎氏「イソップ寓話集」(岩波文庫、一九九九年岩波書店)、中務哲郎氏「イソップ寓話の世界」(ちくま新書、一九九六年筑摩書房)などが適當であり、書誌については、松村恒氏「Miscellanea Bibliographical」(神戸親和女子大学研究論叢「第三一〇号、一九九八年)が充実している。また、松村恒氏「Analecta Indica」(神戸親和女子大学研究論叢「第二八号、一九九五年)は、各種百科事典類の「イソップ物語」の項目を比較検討しその誤謬を明らかにしつつイソップ物語の諸伝本とその周辺について知識を提供するユニークな論考となっている。
- (28) 中務哲郎氏「イソップ寓話集」(岩波文庫、一九九九年)「解説」により、本文もこれより引用する。本書は Ben Edwin Perry, *Aesopica. A Series of Texts Relating to Aesop or Ascribed to Him or Closely Connected with the Literary Tradition that Bears His Name. Vol. 1: Greek and Latin Texts. The University of Illinois Press, Urbana 1952* のギリシャ語の四七一話の全訳である。
- (29) 小堀桂一郎氏「伊曾保物語」(原本考(上)ーシユタンヘーヴェル本「イソップ集」に就てー)【『文学』四六一〇、一九七八年一〇月】、小堀桂一郎氏「伊曾保物語」(原本考(下)ーシユタンヘーヴェル本「イソップ集」に就てー)【『文学』四六一二、一九七八年一二月】。遠藤潤一氏「邦訳二種伊曾保物語の原典的研究」(一九八三年風間書房)
- (30) その邦訳には、伊藤正義氏訳注「イソップ寓話集」(一九九五年岩波ブックサービスセンター)があり、引用はこれによる。
- (31) 「物語インド起源説」については、松村恒氏「Analecta Indica」(神戸親和女子大学研究論叢「第二四号、一九九一年)に言及されている。
- (32) 中野定雄氏他訳「プリニウスの博物誌」(一九八六年、雄山閣)による。
- (33) フーシェ著門脇輝夫氏訳「仏陀の前生」(一九九三年東方出版、原著は一九一九年刊)。
- (34) 筆者が直接参照した湯山明氏の論文は、「仏教説話文学研究覚書(1)」「注好選」下巻第十話「双雁は渴せる亀を将て去る」雑録「仏教説話文学研究覚書(2)」「注好選」下巻第十話「双雁は渴せる亀を将て去る」試訳「創価大学国際仏教学高等研究所年報」創刊号、平成九年、「仏教説話文学研究覚書(3)」「創価大学国際仏教学高等研究所年報」第二号、一九九九年)。「The Kacchapa-jataka in Bas-relief at the Candī Mendut in Central Java」(前田恵学頌寿記念 仏教文化学論集)所収、平成三年山喜房仏書林。その他参照し得なかつた論文については、「仏教説話文学研究覚書(1)」の注を参照されたい。
- (35) 前掲注(14)参照。
- (36) 肥塚隆氏責任編集「世界美術大全集 東洋編」第十二巻(二〇〇一年小学館)二一五頁。肥塚氏が同書「解説」で言及された「最近の研究」とは、本書で紹介したクロックケ氏のものである。
- (37) 前掲注(24) J. P. Vogel, *The Goose in Indian Literature and Art*, 45p
- (38) ゴドウィン著川島昭夫氏訳「キルヒヤーの世界図鑑」よみがえる普遍の夢(一九八六年工作舎)。同書には、荒俣宏氏・泷沢龍彦氏・中野美代子氏の論考が収められている。また、松村恒氏「A・キルヒヤー」(『解中国』所載の梵語字母表)【『印度学仏教学研究』第四〇巻第一号、平成三年)は、欧州に早くデーヴァナーガリー文字を紹介した文献として「シナ図説誌」に注目し、キルヒヤーとその周辺の人物について考察している。
- (39) 泷沢龍彦氏「A・キルヒヤーと遊戯機械の発明」(『黄金時代』所収、薔薇十字社一九七一年)
- (40) 泷沢龍彦氏「姉の力」(『思考の紋章学』所収、昭和五二年河出書房新社初刊、後に「泷沢龍彦全集」十四(一九九四年河出書房新社)に再録)に

は、「支那図説」は、勃興しつつあったヨーロッパの支那学の記念碑的な作品で、一六六八年にはドイツ語とオランダ語に、一六六九年には英語に、一六七〇年にはフランス語にそれぞれ翻訳されているところを見て、その評判の大きさが知れるだろう。」とある。

(41) 以上の記述は中野美代子氏「シナ図説誌」―アタナシウス・キルヒヤー「初出は『遊』一〇二号一九七九年、後に『シナ図説誌』の想像力」ともども同氏「中国の青い鳥」に所収）を参照した。

(42) 中野美代子氏「中国の青い鳥 シノロジー雑草譜」(平凡社ライブラリー、一九九四年)。本書は同氏「中国の青い鳥 シノロジーの博物誌」(一九八五年南想社)を大幅に改訂し副題を変更したもの。キルヒヤーに関して「シナ図説誌」―アタナシウス・キルヒヤー」と「シナ図説誌」の想像力」の二編を収める。

(43) 平凡社ライブラリー版「中国の青い鳥」二七四頁。

(44) 中野氏によれば、この「亀」に似た奇妙な「漢字」は、アムステルダムで出版された「シナ図説誌」にのみ見られ、同年に出版された「アントワープ版『シナ図説誌』」には見られないとのことである。

(45) 澁澤龍彦氏「姉の力」(「思考の紋章」所収)には、次のようにある。

その序文で、キルヒヤーは自分が使った資料の出所を明らかにしているが、それによると、まず第一に名前が挙げられているにはイタリアのイエズス会士マルティノ・マルティニ師である。彼には『支那新図』ほか多数の著書があり、キルヒヤーの数学の弟子だった。さらにポーランドのイエズス会士で、明の永明帝の宮廷で活躍したミシエル・ポイム師、オーストリアのイエズス会士で、やはり中国に八年滞在したヨハネス・グリウパー師などの名前が挙げられている。ただ、ここに明記されていないが、しかもキルヒヤーが大いに利用したにちがいない情報源があった。一六一五年、フランスのイエズス会士ニコラ・トリゴーがラテン語に翻訳して出版した、北京で死んだマテオ・リッチの回想録である。場所によつては、この回想録をほとんど敷き写しのように使いつつながら、ときどき自分の独断を挟むのである。エジプトという言葉が出てくるところは、まず彼の独断だと思つて差

支えあるまい。

ここにいわゆるマルティノ・マルティニ師 (Martin Martini) の「支那新図」に興味をそそられる。同師は一六五四年にアントワープで『De bello tartarico historia』を出版した由。また『Histoire de la China』[Belium Tartaricum, or the Conquest of the Great and most renowned Empire of China] などという書名を偶目した。これらは同一の書かとも思われるが筆者未見。

(46) 劉兆元氏著「中国亀文化」(一九九二年上海文芸出版社)の口絵写真を見ると、「長尾緑毛亀」の藻は甲羅全体を厚く覆っており、さらに後方へ蛇の尾のように長く伸びている。

(47) 武田雅哉氏「蒼頡たちの宴 漢字と神話とユートピア」(ちくま学芸文庫、一九九八年)一〇五頁から一一四頁。また、キルヒヤーの中国語・漢字観については Mungello, Curious Land, pp. 134-73, Chapter V, The Protosinologist Kircher and the Hermetic Connection in the European Assimilation of China. があつたのう。

(48) 「シナ図説誌」はその復刻版がネパールで出版されている (Athanasius Kircher, China Illustrata, Bibliotheca Himalayca Series I, Volume 24, ed. H. K. Kuloy, Nepal Kathmandu, Ratna Pustak Bhandar, 1979) 英訳者 Charles van Tuijl, CHINA ILLUSTRATA with Secred and Secular Monuments, Various Spectacles of Nature and Art and Other Memorabilia. (Indiana University Research Institute for Inner Asian Studies, Bloomington, 1987) があつた。その「主要図版をすべて」収録したというのが、荒俣宏氏「バロック科学の驚異」(ファンタスティック・ダズン10、一九九一年リポポート)で、キルヒヤーの「ノアの箱船」「支那図説」「地下世界」とがナンニ編「キルヒヤーの博物館自然史標本目録」の図版を収め、巻頭には同氏「普遍叡智をきわめた超人―A・キルヒヤーとその業績」がある。